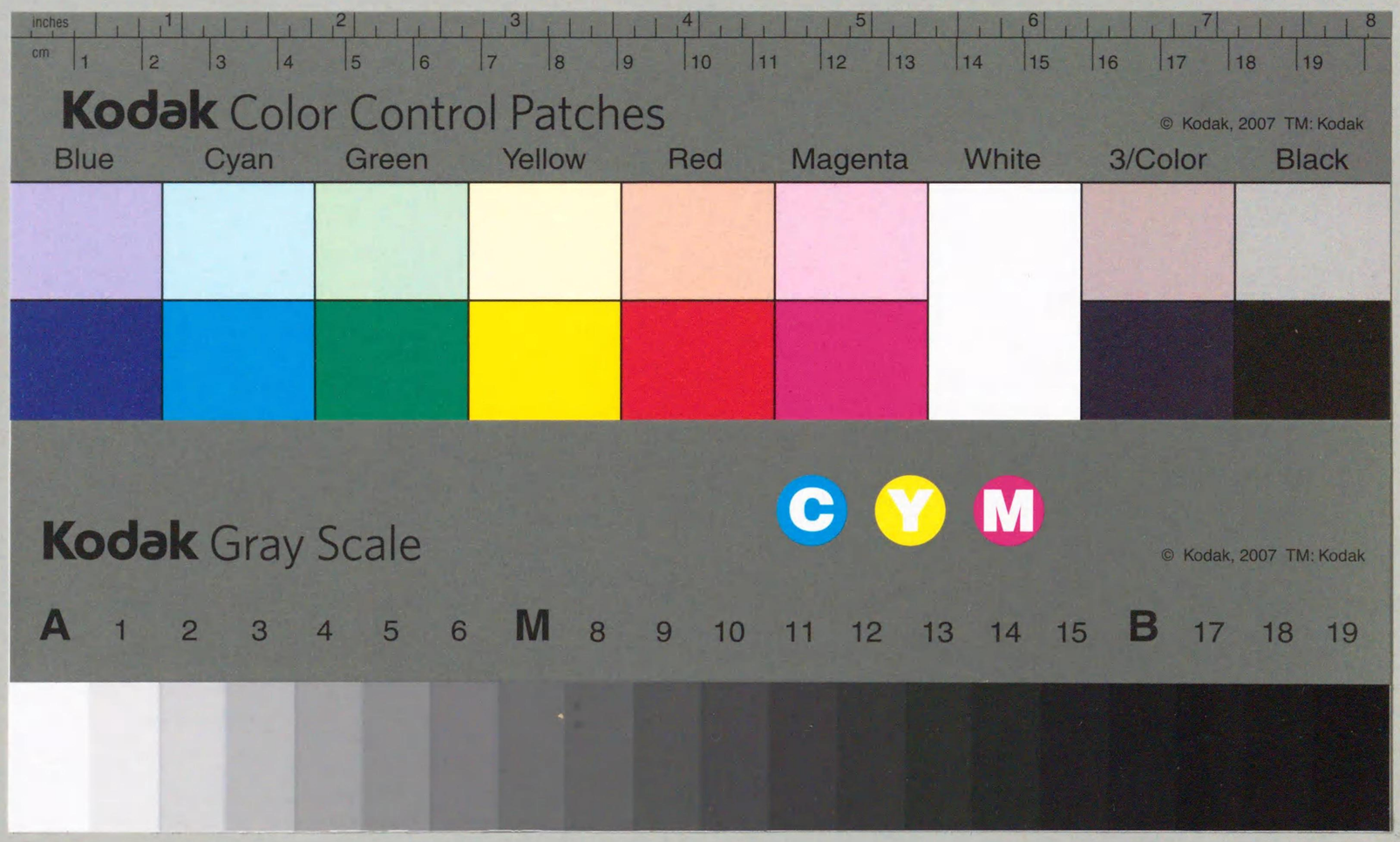


特47
658
特47-658
1200500896396

エ-3481

修身歴史談

251
706

特47
658

見出し

神武天皇……一
野見宿禰……二
日本武尊……一六
神功皇后……二三
仁德天皇……二九
物部守屋……三八
聖德太子……四二
中臣鎌足……四四

明治
40 2 9
内交

壬申の亂……五一
奈良の都……五五
和氣清麿……五九
阪上田村麿……六五
六歌撰……六八
菅原道眞……七一
天慶の亂……七六
女の學者……八〇
源義家……八三
保元の亂……八七
平重盛……九四
檀浦の役……一〇二
源頼朝……一〇六
袈裟御前……一一〇
北條時頼……一一七
蒙古の襲來……一二〇
護良親王……一二六
兒島高德……一三〇
櫻井の驛……一三二
北畠親房……一三六

足利義滿……一三七
應仁の亂……一四一
川中島の役……一四五
毛利元就……一四九
本能寺の變……一五一
征韓の役……一五五
德川家康……一五八
新井白石……一六一
水戸黃門……一六四
米艦の渡來……一六六
櫻田の變……一七〇
白虎隊……一七四
御奠都……一七九
征臺の役……一八一
樺太千島交換……一八四
鹿兒島の亂……一八七
朝鮮の內亂……一九二
官制の改革……一九七
憲法發布……一九九

立太子……二〇三
帝國議會……二〇三
朝鮮の變亂……二〇四
日清戰爭……二〇八
遼東還附……二一六
北清事件……二一八
日英同盟……二二〇
日露戰爭……二二三

の、お話が、面白く、了解易く、書いてあります。

歷史修身談

文友會編

神武天皇

○紀元元年
神武天皇卽位

○紀元二年
論功行賞

○紀元四年
皇祖天神ヲ鳥見山ニ祭ル

一年の中には、三大節とて、御祝ひの日が、三日ありまして、日の順で申せば、第一が、一月一日の、四方拜、第二が、二月十一日の、紀元節、第三が、十一月三日の、天長節であります。一月一日のめでたいのは、

○紀元七九年
綏靖天皇即位
○紀元一一三年
安寧天皇即位
○紀元一五一年
懿德天皇即位
○紀元一八六年
孝昭天皇即位
○紀元二六九年
孝安天皇即位
○紀元三七一年
孝靈天皇即位

何人でも、わかつて、居ります。又、十一月三日は、天皇陛下の、御誕生日で、これも、亦、めでたい日でありますから、われわれは

君が代は、千代に、八千代に、さざれ石の、いはほとなりて、こけのむすまで。

の、國歌を唱ふて、天皇陛下の、萬歳を、祈るのであります。彼の、二月十一日の、紀元節は、どうして、めでたいので、ありませうか。

○紀元四四七年
孝元天皇即位
○紀元五〇四年
開化天皇即位
○紀元五六四年
崇神天皇即位
○紀元五六五年
饑饉疫病流行ス
○紀元五六九年
神器ヲ大和笠縫邑ニ遷シ天照太神ヲ祭ル
○紀元五七三年

これから、紀元節の、おめでたい故を、はなして御聞かせ、申しませう。畏れ多くも、遠い遠い、昔のことで、ありますが、天皇陛下の御先祖が、日向の國を、御出立なされて、十幾年の長い間、わるものどもの御征伐に、御骨折

初メテ四道將軍ヲ置ク
○紀元五七五年 戸口ヲ調査ス
○紀元五八〇年 諸國ニ課シテ船舶ヲ造ラシム
○紀元六二五年 詔シテ池溝ヲ開キ水利ヲ通ス
○紀元六二八年 任那始メテ入貢ス

なされましたが、こうこう、わるものも、降參しましたから、大和の國の、橿原の宮に、はじめて、天皇の、御位に、御即き、遊ばしましたのが、丁度、今から、二千五百六十年前の、正月でありまして、それが新暦では、二月の十一日に、當るのであります。そうして、この日から、前を、神の代と云ひ、後を、人の代と、申しまして、この日が、我が國の、紀元の日であるので、御座います。それゆゑ、われわれは、この

國の、あらむ限りは、この紀元節を、祝はなければ、ならぬので、あります。

その御先祖の御名を、神武天皇と申し、鸕鷀葺不合尊の、第四番目の、皇子でありまして、御年十五の時、皇太子に立たせられ、日向の、高千穗の宮に、御坐になつたので、あります。一體、わが日本は、嘉禾が、生きますから、豐葦原の瑞穗國と、申しまして、天皇の御先祖が、神さまから、御授かりに、なつたので、ありますが、元と、九州

の邊隅に、御坐で、ありましたから、遠い東の方には、その御威德に、從がはなかつたものが、澤山ありました。天皇は、大層、これを、憫然に思召しまして、御年四十五の時、皇族、群臣を引つれ、御自身で、御征伐に、御出かけになりました。先づ、速吸の門まで、御出陣になりますると、そこに、珍彦といふものが居て、皇軍を、御迎へ申しましたから、これを、案内者にして、豐前、筑前へと、御進發になり、ここより、

長門へ御渡りになつて、安藝、備前へと、東へ、東へ、御進軍になりました。備前の高島宮では、舟、兵糧など、十分に御準備をなされて、攝津の浪速から、和泉の蓼津へ、御上陸になりました。それから、道を、龍田の方へ、御取りなさらうと云ふ御考で、ありましたが、大層、ひどい路で、ありましたから、膽駒山を越えて、大和へ御入りなさらうとすると、そこに、酋長の長髓彦と、云ふものが居りまして、饒速日命を奉

じ、大軍で、御途さきを塞ぎましたから、戰爭を爲されましたが、勝利がありません、其の時、皇兄五瀨命は、賊の矢に御中りになつて、終に、御薨になりました。皇軍の方では、遙遙、三百里からの、遠征でありますから、無暗の戰爭は、出來ませぬ、寧、他の路から、大和へ入つて、賊を、背後から擊つ方が、よからうとの、御評議になり、一先づ、舟で、紀州の海岸に、沿いて、南の方の荒坂津といふ所から、御上陸になり、

道道、賊を討ち平らげ、こうこう、大和へ御攻め入りになりました。大和の地は、高天原こて、神さまの、御在なされた所で、ありますから、神さまの、御子の、御來着と聞いて、皆々、喜んで降參しました。けれども、彼の、長髓彦ばかりは、神の子に二た種はない、などと言ひ觸らして、中中、降參致しません。それで、いよいよ、御征討を、お初めなさいました。時に、一羽の鵄が、何處から、參りましたか、知れません

が、天皇のお弓の弭に、止まりまして、靈妙な光を出しますと、賊等は、皆、目がくらんで、皇軍は大勝利を得ました。これが、唯今の金鵄勳章の起因で、ございます。其の中に、饒速日命が、長髓彦を誅して、降參することになりまして、全然、賊どもは、平らぎましたから、即位の式を行はせられたのであります。此の年が、我國の紀元元年でございます。毎年二月十一日の、紀元節は、此の日を祝ふのであります。其の時、

○紀元六三二年
垂仁天皇即位

○紀元六三六年
皇后ノ兄、狹穗彦謀反誅ニ伏ス

御年は六十二で、御坐りまして、それから、御位に在はしましたこと、七十六年、百三十七の御齡で、御崩れになりました。毎年、四月三日は、この天皇の、御崩の日に當るので、あります。

野見宿禰

野見宿禰は、出雲の國の、人でありまして、垂仁天皇さまの、御代に、仕へて、智慧があつて、強いといふ評判が、高かつた人で、

○紀元六五六年
天照太神ノ廟ヲ伊勢度會ニ遷ス

○紀元六五九年
詔シテ殉死ヲ禁ズ

○紀元六六六年
諸國ニ令シテ池溝ヲ開カシム

あります。其時に、當麻蹴速と、云ふ、強い強い人が、居りまして、天下に、己に、敵ふものは、ないと言つて、大層、自慢をして、居りました。天皇は、これを、御聞き遊ばして、その威張り、まはすのを、御惡み、なされ、そ

の高い、鼻を、折つて、やらうと、思し召しまして、或る日、蹴速を、召し、宿禰と、一番、角力を、取れと、勅命を、なされました。蹴速は、その技倆を、天覽に、入れやうと、思つて、勇み立つて、參りましたが、その、高言にも、似ず、脆くも、宿禰に、投つけられまして、其の上に、肋骨を折つて、其の場で、遂遂、死んで、しまいました。これが本朝で、角力といふものの、始めであります。又、むかしは、我國に、

殉死して、身分の高い人が、亡なられますと、冥土まで、御供をすると、いふので、近侍の人人が、一所に死んだ、ものて、ありました。天皇の御弟に、當らせまする、倭彦命の、御かくれ遊ばした時にも、其の近臣の、殉死を、したものが、大勢ありました。そのうちには、全然、死にきれず、土の中から、首だけを出して、泣き叫んで、居るものが、あつて、その聲が、夜晝、絶えません。天皇は、これを、お聞きになつて、いかにも、憐に、思召し、好き、工夫は、ないかと、群臣に、御尋ねになりました。處が、宿禰は、土にて、人や、馬の形を造つて、それを、墓へ立てて、殉死の代りに、したいと、申し出しました。天皇は、これを、御採用になつて、これから、殉死のことが、なくなりました。當今、古墳墓を掘ると、往往、人形のようなものが、出ますのは、此の殉死の身代りを、いたしましたものでありました。これがために、宿禰

○紀元七三一年
景行天皇卽位

○紀元七四二年
熊襲反シ天皇親征シ給フ

○紀元七五五年
武内宿禰ヲ遣シテ東北ヲ巡察セシム

は、土師といふ姓を、賜つたのであります。

日本武尊

第十二代景行天皇の御代に、熊襲といつて、今の九州に、居つた賊が、謀叛を致ましたから、天皇は、御自身に、御征伐のため、筑紫へ御下りになり、頓て、討平げて、都へ御還りになると、又、其の餘黨が叛きました。このたびは、皇子の小碓命と申す御方を、御遣はしになりました。命は、御

○紀元七五七年
日本武尊熊襲ヲ征ス

○紀元七七三年
日本武尊東夷ヲ平ゲ歸途ニ薨ス

○紀元七八七年
諸國ニ令シテ田部屯倉ヲ興サシム

○紀元七九一年
成務天皇卽位

○紀元七九三年

年が、漸つと、十六歳でありましたが、すぐさま、賊の住家へ、御出になつて、その動靜を、探つて居られますと、賊の魁は、近頃、新室が出來上つた、祝に、一族を集めて、酒宴を、するとのことでありました。命は、そこで、妙い計を、一つ考へ出されました。御年の頃と云ひ、容貌と云ひ、女に、姿を紛粧すには、倔强でありましたから、短刀を肌につけ、女の裝束をして、魁の家へ入り込み、折があつたらと、附けれ

武内宿禰大臣トナル

○紀元七九五年
山河ヲ界シ國郡縣邑ヲ分ツ

らつて、居られました。神ならぬ身の、賊魁の川上梟師は、何も知りませんから。好い心持になつて、醉ひ倒れて居ります。それを、待ち構へて、居られました小碓命は、唯、一突に、御殺しなされました。その場を外づさず、こやつをも、仕とめてくれんと、勢こんで、弟梟師を刺しましたところが、この方は、餘り醉つて、居なかつたと、見へまして、『無禮もの奴、何者なるぞ』、と怒鳴り立てましたから、命は御辭、靜かに、

『我こそは、景行天皇の皇子、小碓命である ぞ、』と仰せられました。此御言を、聞きました、弟梟師は、思ひも寄らぬ事、命の、雄雄しき振舞ことに、身の痛さをも忘れ、『そんなに、雄武き命の、お在でなさることは、知らなんだ、願くは、日本武の尊號を、差上げたし、臨終の、お願であります、』と云つて、遂遂、誅されて、終いました。これから、命を、日本武尊と、申すのであります。その後、十年程して、東夷と申し、

今の武藏、上野邊の賊が、叛きました。これも、亦、尊が、御征伐になりました。初め、御出立の折、伊勢の神宮へ、御參詣なされまして、其所で、叢雲の劒を佩して、東の國へ、御出になりました。途中、駿河を御通りになる時、土賊が、獵をおすすめ申しましたから、尊は、何心なく、野原に御出でになりまするとかれて、土賊は、謀んで、置いたと見へ、俄に、野原に、火を放けました。すると、草は、枯れて居ります

し、風は、吹き荒れて居りますから、ちょつとの間に、尊の御身の、周りは、不動さまの、やうに、火だらけに、なりました。『憎き土賊め、われを、火攻にしたか』と、クワッと、御怒りになつて、叢雲劒を拔いて、あたりの草を、

薙ぎ立てられました。そうしますと、神風が、吹いて來たものと見え、運好く、風が變りまして、折角、尊を燒かうと思つて、放けた火が、かへつて、土賊を、燒き攻めに、するようになりました。これから、この劍を、草薙の劍と申し、我國の天皇が、代代、御傳へになる、三種の、神器の一つと、なりまして、今は、尾張の國、熱田の神宮に、祀つてあるのでございます。此の劍の由來を、一寸、申ましよう。神代に、

○紀元八五二年
仲哀天皇卽位

○紀元八五三年

素盞嗚尊といふ御方が、ありまして、出雲の簸の川上で、八つ頭のある大蛇を退治なされました、其の大蛇の尾から出たのが、此の劍で、ございます。其の時、大蛇の居りました所が、平時、雲がありましたゆゑ、そこで、叢雲の劍と申したのであります。

神功皇后

第十四代の天皇を、仲哀天皇と申しまして、彼の、三韓の御征伐で、御名の高い、

熊襲又反シ天皇親征シ給フ
○紀元八六〇年 神功皇后三韓征伐
○紀元八六一年 神功皇后攝政
○紀元九三〇年 應神天皇卽位
○紀元九三六年 三韓入貢
○紀元九四五年 百濟王仁來朝シ

皇后さまは、この天皇の、皇后で、あります。この天皇の、御代にも、亦、熊襲が、叛きましたから、又も、遙遙、大和の都から、筑紫まで、御征伐に、御出かけになりました。皇軍は、香椎の宮と申して、丁度、今の福岡の近傍に、本營を、拵へまして、いろ〳〵と、軍の御評議が、ありました。其の時に、皇后さまは、仰せられました。『枝葉は、幾たび、刈り取りましても、根のあるうちは、又、萠出ることがありま

論語及千字文ヲ獻ス
○紀元九五七年 高麗使至ル
○紀元九六〇年 始メテ琴ヲ作ル
○紀元九六六年 使ヲ吳ニ遣シ織縫ノ工女ヲ求ム

す、今根さへ、刈り取れば、枝葉は、刈らないでも枯れます。熊襲の、毎毎、叛きまするのは、新羅と云ふ、根があつて、熊襲の後援を、するからであります。この、根さへ、刈り取つたならば、熊襲のようなものは、枝葉同様で、ありますから、寧、このたびは、熊襲を、討たずに、新羅を、御征伐なされませ』と、申されました。誠に良い、御考で、ありましたが、仲哀天皇さまは、御採用に、なりませんで、やはり、

皇軍を進めて、熊襲をお討ちになりました。

すると、御運わるく、皇軍が敗けまして、その上に、天皇は、陣中で、俄に、御崩れになりました。かさねがさねの、御不幸に、皇后さまは、大層、御嘆きなされましたが、かれて、雄雄しき、御方でありますから、御氣を勵まし給ひて、崩御のことが、知れ渡つては、御方の壯氣を、弱くしますから、態と、おかくしに、なりまして、一方には、士卒を、殘して置いて、熊襲を、攻めさせ、

一方には、御自身に、男子の御裝束をなされて、大臣の武内宿禰といふものを、御連れになつて、遙遙、海を越えて、新羅を御征伐になりました。すると、新羅の王は、不意に、澤山の軍船が、海岸へ着いたものですから、大層、狼狽へ

まして、すぐに、降參を、いたしました。
而して、『たとひ、川の水が、逆さまに流れ、日や月が、西の方から、出ましても、必ず、叛きはいたしませぬ。又、金銀綾羅を、毎年、八十艘の船に、積み載せて、獻上いたしますから、何卒、これまでの罪は、お赦し下さいませ』と申出でました。その隣國の高麗、百濟も、皇后の、御威光に懼れて、共共に、降參いたしました。皇后は、皆な、御許しになり、お役所を、其地に置き、役人を殘して、御還りになりました。この時から、三韓の地は、わが屬國となりまして、熊襲も、亦、こののちは、大層、從順しくなつて、まゐりました。此三韓といふのは、只今の朝鮮の事で、あります。

○紀元九七三年
仁德天皇即位
○紀元九七六年
課役ヲ免スルコ

仁德天皇

大山守尊、大鷦鷯尊、稚郎子皇子、此三人の御方は、御兄弟でありまして、第十五代、應神天皇さまの皇子で、あります。天皇は、

ト三年
○紀元九八五年
茨田堤ヲ築ク
○紀元一〇二五年
田道新羅ヲ擊テ之ヲ破ル
○紀元一〇二七年
蝦夷反ス田道之ヲ討テ敗死ス
○紀元一〇三四年
始メテ氷室ヲ置ク
○紀元一〇五〇年
武内宿禰薨ス
○紀元一〇六〇年
履仲天皇卽位
○紀元一〇六三年
始メテ史官ヲ置キ四方志ニ通ス
○紀元一〇六六年
反正天皇卽位
○紀元一〇七二年
允恭天皇卽位
○紀元一〇七五年
始メテ姓氏ヲ定ム

稚郎子皇子が、別段に、才智があつて、學問も勝れて、御坐になるのを、御可愛がりになり、皇太子に、お立てになりました。やがて、天皇は、崩御になりますること、大山守尊は、ないない、御謀叛の、御企がありました。大鷦鷯尊は、これを、御知りになつて、御諫めなさいましたが、御聞き入れが、ありません。それゆゑ、致方なく、その由を、皇太子に、御告せなさいまして、共共に、大山守尊を、御誅伐なされました。

さて、皇太子は、大鷦鷯尊の、御明德と、御孝心とに、御感心なされ、其の上、弟は、兄の、先に立つては、よろしくないといふ、思召がありましたから、御位を、尊に御讓りなさいました。けれども、尊は。『われは父君の御志に背いてまでも、弟の願を、聞き入れるとは、出來ぬ』とて、御受けになりません。かやうに、御互に、讓り合つて居られますとが、三年にも達り、何れが、眞ん之うの天皇やら、分りませんから、其

○紀元一一一四年　安康天皇卽位
○紀元一一一七年　雄略天皇卽位
○紀元一一三〇年　吳人吳織漢織ヲ貢ス
○紀元一一四〇年　清寧天皇卽位
○紀元一一四五年　顯宗天皇卽位
○紀元一一四八年　仁賢天皇卽位

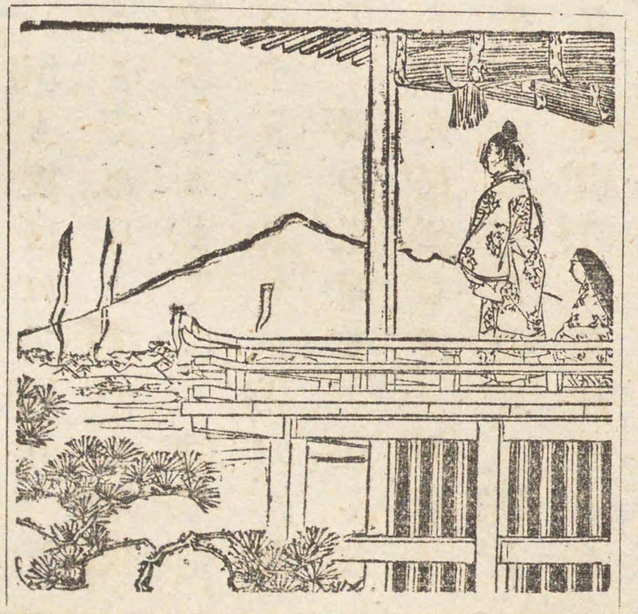
間、百姓は、年貢の納め所に、困りました。其の中でも、漁師などは、獻上しようと、折角、鮮魚を、皇太子の居られまする、菟道宮に持つて參りますと、尊の居られます る、『浪速へ、持つて行け』と仰せられ、又、浪速へ參れば、『菟道宮へ、行け』と申され、その中に、折角の鮮魚も、腐れて、しまい、途方に暮れて、居るものも、多くありました。皇太子は、これを、御聞きになり、斯うして居ては、天下のために、この上もな

○紀元一一五三年　使ヲ高麗ニ遣シテ工匠ヲ求ム
○紀元一一五九年　武烈天皇卽位
○紀元一一六七年　繼體天皇卽位
○紀元一一七一年　都ヲ山背筒城ニ遷ス
○紀元一一九四年　安閑天皇卽位
○紀元一一九六年

い不幸である、われ、生きて居る中は、尊の、位に卽き給ふことは、なかろうと、御心を、お定めになり、遂遂、御自害なされました。尊は、大層、御嘆き、なされましたが、今は、是非に及びません、群臣の勸めを、御聞入れになつて、攝津の、浪速の宮に、御位に卽かせられました。この御方が、仁德天皇で、御坐います、天皇は、誠に、御情深く、唯、人民が、樂に生活て、いけば、朕はどうでも、宜いと、御心にか

けられました。或る時、高臺に登つて、四方を見渡し給ひしことが、ありましたが、其の時、炊ぐ烟の揚がるのが、誠に、少なかつたのを、御覽になりまして、これは、人民が貧しいからであらうと、大層、歎かせ給ひ、急に、詔を、御出しになつて、三年の間、課役として、人民が稅金を、納めるをや、又は、政府の爲に、無賃で、仕事をするをを、御免しになりました。それで、人民は、各、家業を、働くをが、出來るや

うに、なりましたから、三年の後、再、高臺に登つて、御覽なされた時には、炊烟が、盛に揚つて、居りましたから、大層、御喜びになりまして、「朕大に富めり」と、仰せられましたが、この三年の間は、朝廷では、非常な御儉約



をなされまして、御殿は、ところ〴〵、雨のもる所もあれば、垣も壞はれて居り、又申すも、畏れ多い、をでありますが、御衣や、御屨などは、敝ぶれるまでに、御辛抱なされました。そのうち、米や、豆が、大層、能く出來まして、民の工面も、宜くなりましたから、多くの人民どもは、何卒、御殿の、お手入れを、いたしたいと、願上げましても、なかなか、御許になりません。そののち、又、三年たつて、やつと、御許

になりましたから、人民は、大喜びで、あります。みなみな、蟻のやうに、馳せ集まつて、またたくうちに、立派な御殿を、造り上げて、しまいました。其れから、ずつと、後になりまして、時平といふ方が、この、天皇の、御仁德を、頌めまして、斯樣いふ、歌を咏みました。

高き屋に、のぼりて見れば、烟立つ、
民のかまどは、賑はひにけり。

○紀元一二〇〇年
欽明天皇卽位

○紀元一二〇八年
百濟ヲ援ヒ高麗ヲ擊ツ

○紀元一二一二年
百濟ヨリ佛像經論ヲ獻ス

○紀元一二一三年
百濟ヨリ醫卜曆算等ノ博士來朝ス

物部守屋

欽明天皇の御代に、百濟から、佛像と、經文とを、獻上いたしまして、この佛像を、拜むと、大層な功德が、あると申しました。一體、我が國は、むかしから、神さまの、治めなさるる國でありますから、天皇は、直ぐに、御受けになりませんで、先づ、この佛像を拜んで、よいか、わるいかといふことを群臣に、御尋ねになりました。する

○紀元一二一四年
新羅ヲ伐ツ

○紀元一二二二年
高麗ヲ伐ツ

○紀元一二三二年
敏達天皇卽位
蘇我馬子、大臣トナル

○紀元一二四六年
用明天皇卽位

○紀元一二四八年
崇峻天皇卽位

と、其の時の大臣の、蘇我稻目といふ人は、佛像を拜まうといふ方の人でありましたから、「西の國は、皆、佛像を拜がんで居りますのに、獨、我が國だけ、これを拜まぬと云ふ理は、ありません」と申上げました。又、大連の物部

尾輿といふ人や、中臣鎌子といふ人たちは、佛像を、拜んでは、わるいと云ふ方の人でありましたから、「我が國は、むかしから、神の皇國であるのに、その神さまを、捨て、外國の神さまを拜むことは、よろしくない」と申上げました。斯樣に、群臣の申上げることが、二つに分れて、纏まりませんから、その佛像を、大臣の稻目に、下されました。稻目は大層に、喜びまして、自分の屋敷を、寺にして、ここに、佛像を置

きました。これが、我が國に、始めて、佛像の渡りました時で、又、寺の初まりであります。その後、間もなく、わるい病が、大層、流行りまして、人が、澤山に死にました。すると、尾輿の子の守屋などは、「が、ように、わるい病の、流行りますのは、外國から、佛像の入つて來たのを、我が、神神さまが、御腹立なされたからである、それゆゑ、早速、佛像を毀して、神神さまの、御腹立を解さねばならぬ、」と、申上げまし

○紀元一二五三年
推古天皇即位
○紀元一二六三年
冠位十二階ヲ定ム
○紀元一二六四年

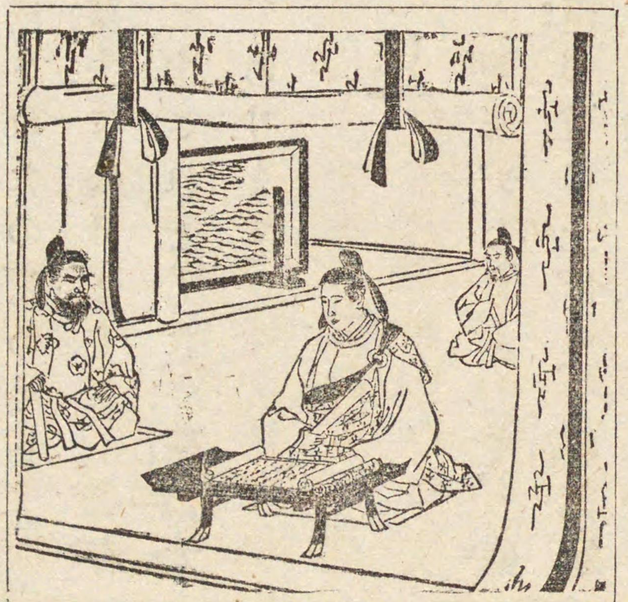
た、天皇は、これを、お許しになりました から、寺を燒いて、佛像を、難波といふ所の堀の中へ、投げ棄てました。

聖德太子

聖德太子は、推古天皇の皇太子で御坐いました。此推古天皇といふ方は、我が朝では、始めての女帝で、御坐いまして、御政治は、一切、太子が、御扱ひになつたのでありました。太子は、誠に、聰明な御方でありました

憲法十七條ヲ撰シ朝禮ヲ改制ス
○紀元一二八一年
聖德太子薨ス
○紀元一二八九年
舒明天皇即位
○紀元一三〇二年
皇極天皇即位

て、一時に、十人の訴を、お聞きになつても、一つも、誤が、なかつたと、申すことであります。學問が、能く、御出來になつて、特に、深く佛教を、御信仰遊ばされ、馬子と共に、これを、御弘めになりました。あの有名い、四天王



○紀元一三〇五年
入鹿ヲ誅ス
孝德天皇卽位
始メテ年號ヲ用ヒテ大化ト云フ

寺、法隆寺など、十一箇所の大きな寺院も、太子が、御建立遊ばされたのであります。御年四十九の時、薨去になりました。御存命中は、厩戸皇子と申されました、聖德太子とは、その諡名であります。

中臣鎌足

蘇我、物部と云ふ、兩家がありまして、蘇我家は、代代、大臣の位に上ぼり、物部家は、代代、大連といふ役を、つとめて居りました。この兩家は、おひおひ、中がわるくなつて、遂には、物部家が、打滅されて、しまいました。すると、蘇我家が、獨で、我が儘を始めまして、邪魔になるものは、皇族方どころか、申すも、畏れ多いをでありますが、天子さまをも、弑し參らせたことがありました。けれども、其の威勢に懼れて、何人も、之を責めるものがありません。これを、非常に殘念に思つて、どうかして蘇我家を、仆ほさねばならぬと、心を傷め

○紀元一三〇九年
大化五年
八省百官ヲ置ク
冠位十九階ヲ改制ス
○紀元一三一五年
齊明天皇皇極重祚

て居つたのが、中臣の鎌足であります。併し、なかなか、一人の手で、出來る仕事でありませんから、誰か、皇族方に、御相談をしたいと、いろいろ考へました、丁度、思ひついたのが、中大兄皇子であります、この皇子は、後に、天智天皇と申された御方で、大層に、賢い御方であります。鎌足は、蹴鞠の會で、皇子に御近付になつて、蘇我家誅伐のことを、御相談申しあげました。皇子も、同じ御考でありましたから、

早速、御同意なされ、蘇我石川麿、犬養勝麿、佐伯子麿などを、味方に御入れになり、折があつたらばと、待つて居られました。蘇我の方では、蝦夷が、大臣を罷めて、其の子の入鹿が、代つて大臣となつて居りますから、先づ、

入鹿から誅めようといふ、御企でありました。丁度其時に、三韓から、使者が入朝ましたから、その參内の折に、いよいよ、入鹿を討ち取らうといふことに、決りました。さて、其の日になりますると、神ならぬ身の、大臣入鹿は、そんなことが、あらうとは、知りませんから、例のやうに參内して、大極殿の御儀式に列なりました。やがて、皇極天皇、出御になりますると、石川麿は、使者の上つりました表文を、御前で讀み上

げます、これが讀み終らない中に、子麿、勝麿が、入鹿を、取押へる手筈でありました。又、萬一のことがあつては、ならぬといふので、御所の門を、皆、閉めまして、皇子は、御手に、槍をお持ちになり、鎌足は、弓に矢を番がひ、大極殿の戸の側に、今や遲しと、待つて居りました。ところが、表文が、もう讀み終いになるのに、子麿も、勝麿も、びくびくして、手出しを致しません。戸の側には、皇子も、鎌足も、氣が焦

れて、堪りません。この機を外づしては、ならぬといふので、皇子は、其の場へ御進みになりまして、御手づから、難なく、入鹿を、御討取りになりました。引き續いて、其の父の蝦夷も、誅されましたから、惡逆無道の蘇我家は、滅びまして、めでたく、大化の御新政と、なりました。後に、皇子が、天皇の御位に、お即きになつた時、鎌足を、内臣といふ役に、御取立てになりまして、藤原の姓を賜はり、大織冠といふ、

○紀元一三二八年
天智天皇即位

○紀元一三二九年
藤原鎌足薨ス

○紀元一三三一年
弘文天皇即位
壬申ノ亂

○紀元一三三三年
天武天皇即位

一番、立派な位を、御授けに、なりました。

壬申の亂

天智天皇は、誠に、明君で御坐いまして、未だ、皇子で御在でになりました頃、鎌足と共に、無道の入鹿を、御誅戮になり、續いて、孝德天皇の御代に、名高い大化の御改革をも、なされたのであります。殊に、御仁孝の御評判も高く、母君齊明天皇の、御かくれ遊ばした時も、六年の長い間、喪

○紀元一三五〇年
持統天皇卽位
○紀元一三五五年
鑄錢司ヲ置ク
○紀元一三五七年
文武天皇卽位
○紀元一三六一年
太寶元年
太寶令ヲ須ッ
○紀元一三六二年
太寶二年
新律度量ヲ頒ッ

に居られました。こんなことは、我我臣民も、及はぬことであります。唯、申すも恐れ多いことは、天皇崩御の後、御皇弟、大海人と、御皇子、大友との間に、戰爭をなされたのが、誠に、誠に、殘念であります。天皇が、御在世の中は、大海人は、御後嗣と定まり、大友皇子は、太政大臣でありました。やがて、天皇御臨終の折、大海人をお召しになり、後後のことを、御話しになりました。すると、かねがね、天皇は、皇

子の御才學を、御愛しみ遊ばさるることを、大海人には、能く、御存知でありましたから、御讓位のことは、固く、御辭退になりまして、僧となつて、吉野へ御入りになりました。そこで、天皇について、御位に卽かせられましたのは、大友皇子で、ありまして、弘文天皇と申し上げます。御卽位の後、間もなく、わづかのことから、吉野の大海人は、天皇の位を、望ませらるる、といふ、根もない噂が立ちました。これがた

め、朝廷と吉野との中が、御不和くなつて、思ひもよらない、戰が始まつたのでありました。すると、朝廷の方では、不意のことですから、人が揃ひません、ですから、天皇御自身に、御出陣になりましたが、朝廷の方は、兎角、敗戰が

○紀元一三六八年
和銅元年
元明天皇卽位

多くて、天皇には、こうこう、御自害なされました。そこで、大海人が、天皇の位にお上りになりました、天武天皇と申しますのは、此の御方であります。これは、紀元千三百三十二年のことで、ありまして、丁度、壬申の歳に、當りますから、壬申の亂と申すのであります。

奈良の都

元明天皇が、御卽位の後、三年目、和銅三

○紀元一三七〇年
和銅三年
都ヲ奈良ニ遷ス

○紀元一三七二年
和銅五年
古事記成ル

○紀元一三七三年
和銅六年
風土記ヲ作ル

○紀元一三七五年
靈龜元年
元正天皇卽位

○紀元一三八〇年
養老四年

年に、大和の奈良へ、都を御遷しになりました。それから、聖武、孝謙、淳仁、稱德、光仁、桓武の七代の天皇が、ここに、御住居になりました。桓武天皇が、延曆十三年に、山城の國へ、御遷都になりますまで、八十五年の間を、奈良朝の時代と申すのであります。この時代には、いろいろの御規則も、能く揃ひ、掟も、能く行はれ、國國には、學校も出來ますれば、歌などは、誠に能く、流行りまして、上手な歌人が、澤

舍人親王、日本記ヲ撰ブ

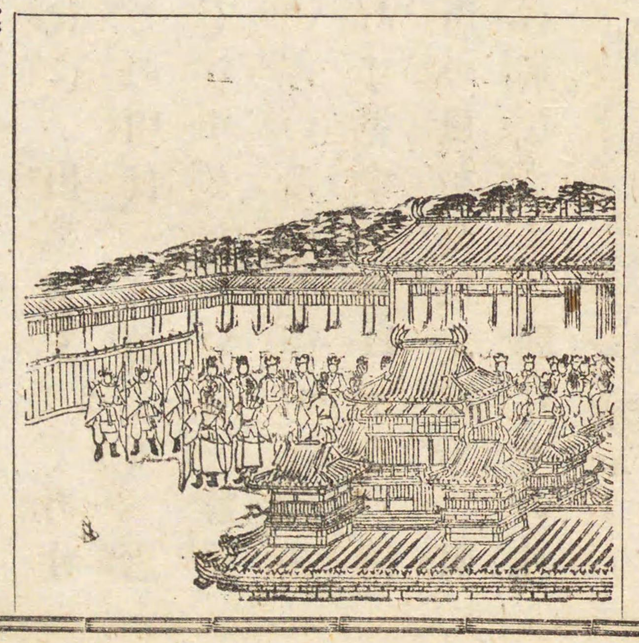
○紀元一三八四年
神龜元年
聖武天皇卽位

○紀元一三八九年
天平元年
人丸卒ス

○紀元一四〇〇年
天平十二年
廣嗣反ス

○紀元一四〇一年
天平十三年
諸國ニ國分寺ヲ

山ありました。繪と云ひ、建築と云ひ、なにも、かも、今の人の、驚くようなものが、隨分、この時代に出來て居ります。佛法も、なかなか、弘まりまして、代代の天皇は、大方、御信仰なされました、今でも、奈良へ參ります



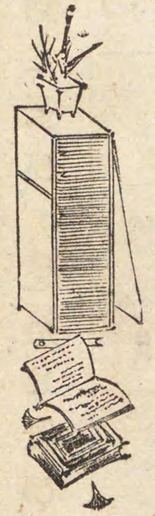
造ル

○紀元一四〇六年
天平十八年
金銅盧遮那佛ヲ
造ル

○紀元一四〇九年
天平勝寶元年
孝謙天皇卽位

○紀元一四一九年
天平寶字三年
淳仁天皇卽位

と、立派なお寺や、大佛などが、ありますが、大抵、この時代に、出來たものであります。又、丁度、この頃は、支那でも、唐の時代が、盛な時でありましたから、態態、人を遣りまして、いろいろの學問や、佛法を習はせたので、あります。それゆゑ、御所などの建築も、唐の風を眞似て建て、町のさまも、左京、右京などと、別けてありました。



○紀元一四二五年
天平神護元年
稱德天皇孝謙重
祚

○紀元一四二六年
天平神護二年
道鏡ヲ法王トス

○紀元一四二九年
神護景雲三年
清麻呂、宇佐ニ
奉幣ス

和氣清麿

稱德天皇は、僧の道鏡といふものを、大層、御信用になつて、太政大臣禪師となされ、後に、又、法王と申す位も、御授けになりました。それゆゑ、道鏡の威勢は、天皇にも、勝さるやうになりましたから、數多の臣下の中には、道鏡に、とり込んで、立派な位に、なりたいといふ惡人どもが、出て來ました。丁度、大宰の神主に、習宜阿蘇

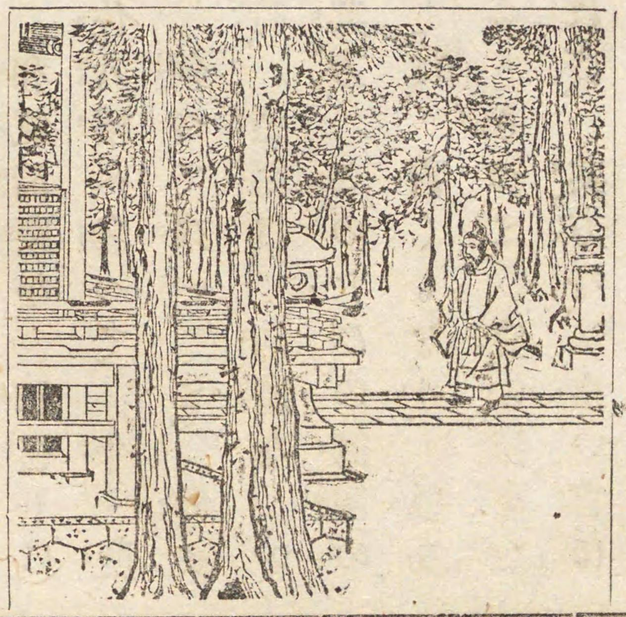
○紀元一四三〇年
寶龜元年
光仁天皇卽位
仲麿、唐ニ死ス

麿と、云ふものが居りまして、根もない詐を、こしらへて、天皇に、申し上げました。實に、實に、この上もない、ひどい詐で、しかも、神さまを、語つて、天皇を、瞞さうといふので、ありました。それが、どんな、詐かと申しますに、「道鏡を、天皇にしたならば、天下が、太平になると、神さまの御告が、ありました」と、申し上げましたのであります。天皇は、道鏡を、よほど、御信用なさつて、御在でなさいましたけれ

ども、これ許りは、直に、御返事を、なさいません。そこで、和氣清麿を、御召しになつて、『其方、宇佐八幡へ參つて、今一度、神さまの御思召を、伺つて來い、』と、仰せられました。その時、道鏡は、清麿を、かげに呼びまして、『其方、このたびの御使の返事次第で、わたしは、善くもなり、惡るくも、なるのだから、きつと、宜い返事を奏上げろ、そうすれば、其方を、良い官にして遣る、若し、わたしが云ふことに背け

ば、命は、ないものと思へ、』と堅く嚇し付けて遣りました。

やがて、清麿は、宇佐八幡へ、參りまして、神さまの御告を、聞いて、歸つて參りまして、いそいで、天皇の御前へ出まして、神勅を奏上るので、ありますが、其の御席



へは、矢張り道鏡も、坐つて居りまして、清麿奴は、定めし、自分の命令た通り、奏上るであらうと、待つて、居りました。ところが、大違で、清麿は、辭正しく、『わが國は、開闢このかた、君と臣との、區別が、嚴重であつて、臣たるものを、君と致した、ためしは、未だありません、天皇の御位は、必ず、必ず、天皇の、御血統の方に限る、もし、萬一、臣の身分でありながら、御位を、望むやうなものがあれば、直ぐに、誅

してしまへ、』と、神さまの、御告でありました、』と、道鏡の威勢をも恐れず、立派に、申し上げましたので、道鏡は、あてが、はづれて、大層、腹を立て、清麿を、大隅國へ、流しものにしました。やがて、天皇の代が、代りまして、光仁天皇の御代になりますと、すぐに、清麿を、御召び戻しになつて、元の官を御授けになつて、道鏡を、流しもの同様、下野の藥師寺の別當といふ、つまらない役に、御下げになりました。

○紀元一四四二年
延暦元年
桓武天皇卽位

○紀元一四四五年
延暦四年
歷代天皇ニ謚號ヲ奉ル

○紀元一四五四年
延暦十三年
都ヲ山城ニ遷ス

○紀元一四五七年
延暦十六年
坂上田村麿征夷大將軍トナル

只今、京都の高雄山にあります護王神社と申す神さまは、此の清麿を、祀つたので、あります。

坂上田村麿

神功皇后が、三韓を、御征伐なされてから、熊襲は、從順しく、なりましたが、東夷は、未だ、なかなか、天子の命に、從がひません、それゆゑ、代代の、天皇は、皆、東夷の御征伐に、御心を、御傷めなされま

○紀元一四五九年
延暦十八年
始メテ木綿傳來、
清麿薨ス

●紀元一四六六年
大同元年
平城天皇卽位

○紀元一四七〇年
弘仁元年
嵯峨天皇卽位
弘仁ノ變

○紀元一四七五年
弘仁六年
諸國ニ茶ヲ裁ウ

した。齊明天皇の時に、阿部比羅夫を、御遣はしになつてから、一時、無事でありましたが、元明天皇このかた、始終、騷騷しく、鎭守府將軍といつて、東夷の亂れないやうに、其處を、守つて居る、大將までが、賊の爲に、殺さ

○紀元一四七六年
弘仁七年
空海、高野山ヲ開ク

○紀元一四八四年
天長元年
淳和天皇卽位

○紀元一四九四年
承和元年
仁明天皇卽位

○紀元一四九五年
承和二年
空海寂ス

れることが、ありました。光仁、桓武の御代にも、御征伐になりましたけれども、皇軍は、いつも、敗けて、歸つて來ることが、多かつたので、ありります。そこで、桓武天皇は、坂上田村麿を、大將軍に、御取立になりまして、東夷征伐に、御遣しになりましたところが、暫時の內に、討ち平げて、しまいました。その後、東夷は、永らくの間、無事で、ありました。

○紀元一五〇二年
承和九年
承和ノ變

○紀元一五一一年
仁壽元年
文德天皇卽位

○紀元一五一九年
貞觀元年
清和天皇卽位
良房、攝政トナル人臣攝政ノ始

○紀元一五二一年
貞觀三年
長慶宣明曆ヲ頒ツ

六歌仙

奈良朝より、延喜の頃までに、咏歌の上手なもの、六人を、撰んで、六歌仙と申します。それは、僧正遍照、在原業平、小野小町、文屋康秀、喜撰法師、大伴黑主で、ありまして、其歌は、此通りであります。

僧正遍照

朝みどり、糸よりかけて、白露を、
玉にぞ、ぬける、はるのやなきか。

○紀元一五三七年
元慶元年
陽成天皇卽位
基經攝政

○紀元一五四一年
元慶五年
奬學院ヲ創置ス

○紀元一五四四年
元慶八年
基經、帝ヲ廢ス

○紀元一五四五年
仁和元年
光孝天皇卽位

月やあらぬ、
春や昔の、
なるならぬ、
我身ひとつは、
もとの身にして。

小野小町

色見えて、
うつろふものは、
世の中の、人の心の、はなにぞありける。

在原業平

文屋康秀

吹からに、秋の草木も、しほるれば、
むべ山風を、あらしといふらん。

喜撰法師

我いほは、都のたつみ、しかぞすむ、
よを宇治山と、人はいふなり。

大伴黒主

思ひ出て、戀しきときは、初かりの、
鳴てわたるを、人やしらめや。

○紀元一五四八年
仁和四年
宇多天皇卽位
基經關白
關白ノ始

○紀元一五五八年
昌泰元年
醍醐天皇卽位

○紀元一五六一年
延喜元年
道眞ヲ貶ス
三代實錄成ル

○紀元一五六五年
延喜五年
古今集成ル

菅原道眞

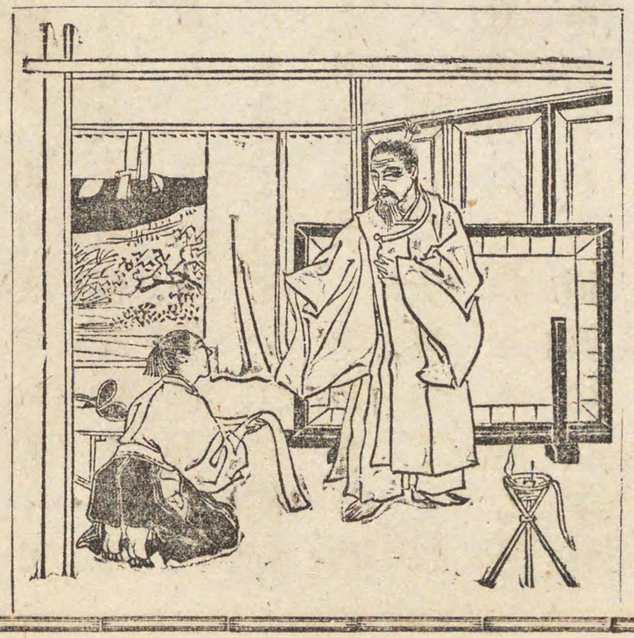
むかし、大臣や、關白などが、折折、我儘を、働いて、天皇に、御迷惑を、かけるものが、ありました。宇多天皇も、關白藤原基經の、我儘に、御懲り、遊ばしましたから、基經が、薨去つてから後は、關白も置かず、太政大臣も置かず、天皇、御手づから、御政治を、御捌きになつて居りましたが、菅原道眞は、才智もあり、學問もあり、

○紀元一五七四年
延喜十四年
三善清行、封事
ヲ上ル

溫順しい人で、ありましたから、この人だけは、決して、我儘などをすることは、あるまいと、御見込になつて、低いところから、御取立に、なりました。やがて、天皇は、御隱居なされて、御位を、醍醐天皇に御讓りなされました。醍醐天皇は、基經の子の時平を、左大臣に、道眞を、右大臣に、なされました。そうしますと、道眞は、固く、御辭退申上げましたが、天皇は、どうしても、御聞入になりませんから、詮方な

く、仰せに隨ひました。さて、此の時平は、先祖代代、よい家柄で、ありますから、とかく、人を見下げまして、我儘をいたしました。そこで、道眞を、その上役にして、時平の頭を、おさへさせようといふ、御相談が、御所の中にありました。それを、洩れ聞いた、時平は、『これは、大變なことになつた、畢竟、道眞の所爲だ』と、思ひまして、一味のものを語らひ、道眞のわる口を、天皇に申上げて、それをおとそうと、

いたしました。其の謀が、なかなか、上手に、出來て居りましたから、天皇も、つひそれを、御信用なさつて、道眞を、太宰府へ、流しものに、なさいました。宇多上皇は、これをお聞きになつて、大層、お驚き遊ばされ、御取な



しを、なさらうといふので、急いで、御所へ、御臨幸になりましたが、何の門も、何の門も、皆閉つて居て、御入りなさることが、出來ませんでした。これは、かれて、かくあらうと、思ひまして、時平一味のものが、閉めさして、置いたのでありますから、こうこう、間に合ひませんでした。そこで、道眞は、大宰府へ、まゐりましてから、詩を賦り、歌を咏み、などして、居られましたが、三年の後、五十九歳で、薨去

○紀元一五九一年

られました。そのあとで、天皇にも、道眞は、寃罪であつたと、いふことが御氣づきになりましたから、道眞の官位を、もとに戻して、お授けになりました。

只今、何處へ參つても、天神さまの、お宮が、ありますが、これは、皆、この道眞を、祀つたので、あります。

天慶の亂

朱雀天皇の御代、天慶年代のことでありま

承平元年
朱雀天皇卽位

○紀元一五九九年
天慶二年
天慶ノ亂

○紀元一六〇七年
天曆元年
村上天皇卽位

○紀元一六一九年
天德三年
吳越ノ遣使來ル

○紀元一六二八年
安和元年
冷泉天皇卽位

す、時の攝政、藤原忠平の家來に、平將門と、いふものが、居りました。どうかして。檢非違使といふ役になりたいと、其の事を、忠平にたのみました。けれども、なれなかつたものですから、大層、腹を立てて、下總へ歸つて

○紀元一六三〇年
天祿元年
圓融天皇卽位

○紀元一六四五年
寛和元年
華山天皇卽位

來ました。そこで、伯父の、國香といふものを殺し、武藏權守興世王と、腹を合せ、謀叛を企てました。自分で、平親王などと、名をつけまして、猿島といふ土地へ、朝廷のやうな家を、こしらへ、方方を、あらしまはりました。この騷ぎに、つけ込んで、伊豫の方でも、藤原純友といふものが、謀叛を起しまして、その一味のものが、時時、京へ來て、民家へ、火を放けますので、上も下も、大騷ぎで、世の中が、物騷になつ

て、來ました。朝廷では、大層、御心配になつて、將門御征伐のためには、參議忠文を、御遣はしになり、純友御征伐のためには、小野好古を、御遣はしになりました。それから、純友も、間もなく、討たれ、平親王の方も、國香の子の貞盛が、俵藤太秀鄕の力を、かりて、親の仇を、討ち取りましたから、忠文の軍勢が、下總へ、着きませぬうちに、天慶の亂の、大本は、平らぎました。

○紀元一六四七年
永延元年
一條天皇卽位

將門が、斯樣に、謀反を起したといふ、原因を、尋ねますと、比叡山といふ、お山の上から、天皇の、お出になる、お宮を、見下してから、急に、羨やましくなつて、遂、謀叛を、起したといふことで、ありました。

女の學者

其昔、藤原氏が、繁昌の時代には、地方では、武士が、我儘をして、居つたり、賊の

○紀元一六七二年
長和元年
三條天皇卽位

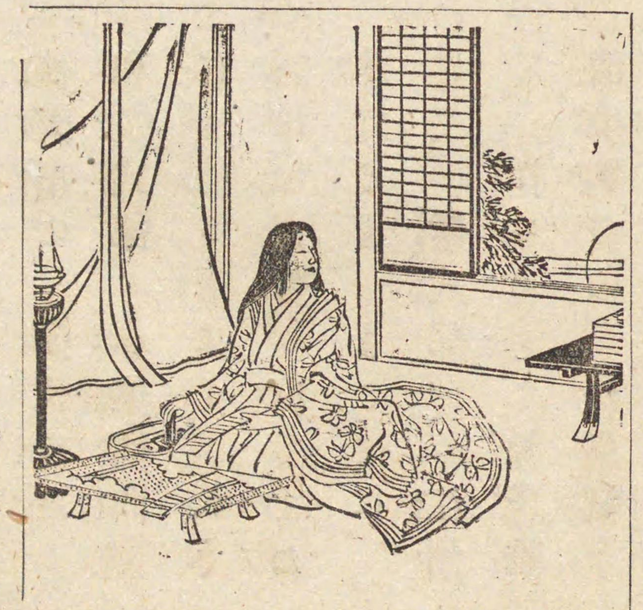
○紀元一六七七年
寛仁元年
後一條天皇卽位

○紀元一六八〇年
寛仁四年
南蠻入寇

○紀元一六八八年
長元元年
平忠常反ス

○紀元一六九〇年
長元四年

あそこ、ここ、あれまはつて、居る、ところも、ありましたが、都では、公卿どもが、まことに、優長に、暮して、居りまして、詩や、歌や、鳴り物などの、流行りましたことは、大層なことでありました。それゆゑ、文學に、



源頼信、忠常ヲ平ク

○紀元一六九七年
長暦元年
後朱雀天皇卽位

○紀元一七〇六年
永承元年
後冷泉天皇卽位

長けた人も、この時代には、澤山居りまして、其の中でも、一條天皇の、御代には、紫式部、清少納言、和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔など、あとにも、さきにも、たぐひない、才女が、一時に、大勢、出てまねりまして、著へた、本なども、まことに、澤山ありました。わけて、紫式部が、江州の石山寺に、參籠つて、作りました源氏物語を、はじめとし、清少納言の、枕草紙、和泉式部の、十六夜日記、そのほか、いろ

○紀元一七一六年
天喜四年
前九年ノ役ノ始

○紀元一七二九年
延久元年
後三條天皇卽位

いろの、歌集などが、今に、和學の、手本として、世の中に、もてはやされて、居ります。

源義家

八幡太郎義家は、武勇名高き、大將であります。或る日、宇治の關白、賴道公の許を訪れました。すると、大江匡房といふ、大層な學者が、來て居りまして、いろいろな、話の末、戰の話が、出ました。丁度、義家

○紀元一七三三年
延久五年
白河天皇卽位

○紀元一七四七年
寛治元年
堀河天皇卽位
院政ノ始

○紀元一七四八年
寛治二年
後三年役ノ始

○紀元一七六八年
天仁元年
鳥羽天皇卽位
源義家卒ス

は、奥州の戰爭から、歸つて來た時で、あ りましたから、その話を、いたしました。匡房も、大層、感心をして、聞いて居りましたが、あとで、人に云ひまするのには、『彼の義家は、誠に立派な大將だ、けれども、惜しいことには、

○紀元一七八四年
天治元年
崇德天皇卽位

○紀元一八〇二年
康治元年
近衞天皇卽位

兵法を知つて居らぬ』と、申されました。之を、義家の家來の宗任が、聞まして、大層、腹を立て、義家に、かやうかやうだと、ありのままに、告げました。そうしますと、義家は、腹を立てるかと、思ひの外、かへつて、喜びまして、それから、匡房の弟子となつて、兵法を、習ひました。その後、後三年の役と申して、矢張り、奥州征伐に、行つた時、義家が、或る廣野を、通りますると、今までちやんと、列んで飛んで、居

りました、一連の雁が、忽ち、ちりちりに、亂れました。これを見た義家は、その雁の亂れました、あたりに、きつと、敵の軍兵が、かくれて、居るに違いないと、察して、捜させました。すると、察しに違はず、伏兵が、居りましたから、難なく、これを、討ち取りました。『どうして、大將に、これが、おわかりになつたか』と、家來が、尋ねますと、義家は、『兵法に、鳥亂るは伏なりと書いてある、が、われも、匡房に、習は

○紀元一八一六年
保元元年
後白河天皇卽位
保元ノ亂

○紀元一八一九年
平治元年
二條天皇卽位
平氏ノ亂

なかつたなら、彼の伏兵を、知らないで、通り過したのであらう、』と、申されました。

保元の亂

後白河天皇が、御卽位の年に、鳥羽法皇が、御かくれになりました。その御報せを聞いて、崇德上皇は、鳥羽殿へ、赴かせられました。すると、御遺言だと、いふので、門衞が、入れない。上皇は、かれて、天皇が、御卽位のことについても、大層、御不滿で、

○紀元一八二〇年
永暦元年
頼朝、伊豆ニ流サル

○紀元一八二六年
仁安元年
六條天皇卽位

○紀元一八二七年
仁安二年
清盛、太政大臣トナル

居らせられましたから、非常に、御腹立ちになつて、左大臣の頼長に、御相談になりました。頼長も、かれがれ、我が兄なる、時の關白忠通とは、中が、不和かつたものですから、上皇を、今一度、御位に御つかせ申し上げ、われは、關白の位に、上らうといふ、野心も、ありましたから、上皇を、御すすめ申して、軍を、起すことにして、急に、源爲義、平忠政などを、呼び集めて、白河殿へ、立籠りました。すると、天皇方

でも、關白忠通が總大將となり、源義朝、平清盛などが、集まつて、天皇を、東三條殿へ、御遷しまうしました。そこで、いよいよ、保元の亂が、始りました。時に、當年取つて、たつた、十九歳、年こそ若いが、弓矢にかけては、日本一の剛のもの、鎭西八郎爲朝は、父爲義、もろとも、上皇方へ、集まる兵士を、見渡しまして、『總勢、かほどに、寡なくては、夜討に限る、今より、東三條殿を、不意打をして、三方から、火

を掛け、一方を攻め立てれば、夜の明ける までには、必然、勝つて終います、かく申 上ぐる、八郎爲朝は、御請合をいたします。 どうぞ、私に、お任せ下さい』と申上げま した。けれども、總大將頼長が、不承知で ございます。爲朝は、『公卿などが、戰の呼 吸を、知るものか』と、つぶやきましたが、 總大將の、不承知ですから、仕方なく、夜 の明けるのを、まつて、居るうちに、かへ つて、天皇方から、夜討に來られました。

今は仕方がないと、いふので、爲朝は、南 の門に上り、よら ば、射んと、矢を 番へて、待つて居 ります。さすがの 清盛も、すすみか ねて居るを、もど かしく思つて、源 義朝、眞先に進ん で出ました。これを見た、八郎爲朝は、『兄

弟でこそあれ、今は、敵と味方、一矢進上』と思つたが、『待て待て、向から、攻められては、とても、勝てない、敗れば、父の上にも及ぶ難義、寧、この兄さへ、生かして置いたら、父の命乞が、出來るだろう』と、考へましたから、態と、兜の鍪を射ました。すると、義朝は、一向平氣で、『未だ未だ若い、技も拙い』、と、大音聲に、叫びました。これを、聞いて、爲朝は、『兄上なればこそ、態態、控えたのであります、御許しと、あ

らば、御命を頂戴いたしましよう』と答へました。爲朝も、よく戰ひましたが、遂遂、上皇方は、打ち敗れまして、上皇は、讃岐へ、御遷されになり、爲義、忠政は、殺され、爲朝は、伊豆の大島へ、流されました。序に一寸、御話し申しますが、この爲朝は、其の後、琉球へ渡り、自分の子供を、其の國の王といたしまして、それから、代代、琉球の王となりました。唯今、華族となつて居る、尙泰といふ人は、元、琉球の王で

○紀元一八二九年
嘉應元年
高倉天皇卽位

○紀元一八三七年
治承元年
治承ノ變

○紀元一八三九年
治承三年
清盛、法皇ヲ幽ス

ありましたもので、これも、爲朝の子孫でありります。

平重盛

高倉天皇の御代、治承元年に、後白河法皇の執事、藤原成親などが、平家を怨んで居る、一味の徒黨を、語らひまして、平家を、仆さうとしましたが、其の謀が、知れて、皆、お刑に遭ひましたが、清盛は、未だ、心にすまぬところが、あると見えて、法皇

○紀元一八四〇年
治承四年
以仁王、兵ヲ起ス

○紀元一八四一年
養和元年
安德天皇卽位

をも、押籠めまぬらせんと、兵をあつめ、自らも、鎧をつけて、今にも押し出さうといたして居ります。ところへ、人の、しらせで、知りました、子の重盛は、大急ぎで、馳け付けて、見ますると、馬には鞍、身には甲冑、一族の者は、皆、出陣の用意が、出來て居ります。重盛は、その中を、烏帽子、直衣で、通りますと、弟宗盛は、兄の袖を、とらへて、『兄上、今は大事です、父上はじめ、皆、鎧を着けて、居りまするに、

その御姿は、何事です』、と、尋ねました。
すると、重盛は、ハッタと、睨みつけ、『何
のために、甲冑を着けて、居るぞ、して又、
敵は、何處に居るぞ、われは、苟も、大臣
大將である、賊、若し、禁裏を、犯せば、
兎も角、さもなくば、何こて、鎧を、着る
べきぞ』と、辭鋭く、叱り付けました。遙
かに、之れを、見て居りました父の清盛は、
『我が子なれども、この姿を見られては』と、
思ひまして、側にありました、黑い法衣を

纏つて、出掛て來て、『コレ重盛、彼の成親
などは、枝葉なれば、今日、法皇に、
一時、或邊へ、行幸を、御請ひ申そうと、思ふが』と、
云つて、重盛の、氣色を、見て居ります。これを聞いた、重盛は、せきくる涙に、胸せまり、少

時、辭もありませんでしたが、やうやうに、口を開き、『今父上の、尊顏を、拜みますと、お氣色が、いづくともなく、我が家運の、末を現はして、居られるやうに、思はれます。凡そ人間と、生れては、親の恩、師の恩、國の恩、君の恩の、四つの恩があると、承りますが、其内、君の御恩こそ、第一に、重いのでありますす。よし、我が家、葛原親王の、血統とは申せ、一旦臣下の身分となつては、身を碎いても、君に盡すが、眞の

道であります。先年、我伯父刑部卿へ、昇殿の御許ありたることすら、世間では、皆、例のないことと申しましたのに、今、父上は、太政大臣と、お成になり、臣たる者の、此上もない榮華を、お極めなされ、不肖なる私まで、なほ、大臣大將に、進みましたばかりでなく、我が一家一門のものどもも、ことごとく、朝廷に仕へて、立派な官職に、就いて居ります。實とに實とに、君の御恩は、海よりも深い、次第ではありませんか。

其上、惡人どもは、もはや、刑罰に行はれたのに、なほ、御憤りをば、漏らさうと、し給ふは、いかなる御思召でありますか。君のために、身をば、捨てるこそ、武臣たるものの慣なるに、身のために、君を忘ることは、何事でありますか。是を、思へば、私として、如何して、默つて、居られましよう、所詮思ひ止まらせ給はずば、私は、今から、禁闕へ馳參り、父上に向つて、弓矢を引き申すとも、主上を、護衛り奉る、決

心であります。其昔、保元の戰に、勅命にて、父の爲義を斬つた、源義朝を、私は、惡逆無道のものと、思ひましたが、今は、我が身の上の事となりました。嗚呼、君に忠義をしやうと思へば、孝行をすることが出來ず、父上に、孝行をしようと思へば、君に忠義をすることが出來ず。願くは父上、所詮、このこと、思ひ止まらせ給はずは、先づ、この、重盛の首を、刎ねて、のち、この門をば、出でさせ給へ』と、涙ながら

○紀元一八四四年
壽永三年
義仲亡ブ
一ノ谷戰爭
檀浦ノ役

に、諫めました。流石の清盛も、ハッと、思ひまして、その企をば、思ひ止まりました。その後、治承三年に、重盛は、父に先だつて、薨去られましてからは、又、清盛を諫めるものが、なくなりました。

檀浦の役

『驕るもの、久しからず』と申しまして、平家のもので、なければ、人でないやうにまで、言ひ囃されました。その平家も、重盛

元暦元年
後鳥羽天皇即位

が、父に先つて。薨去られましてからは、清盛の我儘は、日に日に、増長して來まして、次第次第に、人人に、嫌はれるやうになりまして、其の勢も、衰へて來ました。けれども、なほ、清盛は、平家の大黒柱で、ありますか

ら、其存命中は、どうか、こうか、もちこたへて、居りましたが、清盛が、薨去つてからは、宗盛といふ、餘り賢くない人が、後を繼ぎました。それから後、富士川の戰にも敗け、一の谷の戰にも敗け、屋島でも、敗けましたから、九州へ、逃げようといたしますと、源頼朝の弟の、範頼が、大兵を率れて、こうに、豐後に居りまするし、詮方なく、一時、長門國の檀浦に集まりました。勝ち誇つたる、源義經は、兵船七百艘

で、檀浦へ攻め込みましたが、平家方も衰へたとはいへ、未だ強く、ここを、先途と、戰ひましたから、一時は、源家も敗色でありました。所が、平家方の田口成能が、源家へ内通して、降參した爲めに、宗盛父子は、捕へられ、二位尼平時子は、御年が、漸と、八歳にならせらるる、安德天皇を、お抱き申して、平家の一族もろとも、海に飛び込んで、底の藻屑と、なりました。

○紀元一八四五年
文治元年
頼朝、總追補使
トナル

○紀元一八五二年
建久三年
頼朝、征夷大將
軍トナル

○紀元一八五九年
正治元年
土御門天皇卽位
頼朝薨ズ

○紀元一八六二年
建仁二年

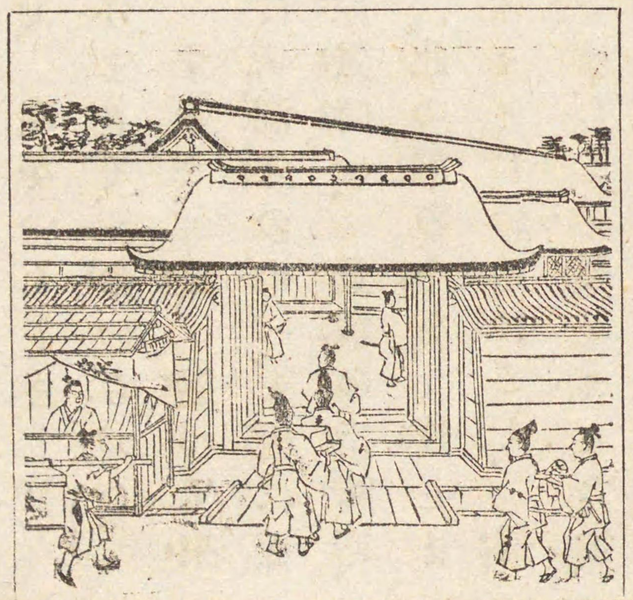
源頼朝

頼朝は、左馬頭義朝の子でありましたが、平治の亂に、父や兄などと、別れ別れになりまして、遂遂、平家に捕へられました。けれども、命だけ、助けられて、伊豆へ、流され、伊東祐親の家に、居りました。すると、頼朝は、祐親が、自分を殺そうと、して居ることを、知りましたから、北條時政の許へ、逃げて行きました。そのうちに、

頼家、征夷大將
軍トナル

○紀元一八六三年
建仁三年
實朝、征夷大將
軍トナル

『平家を滅す爲め、軍を起す』といふ、以仁王の令旨が、まねりましたから、時政と、相談をして、先づ、伊豆の目代を、爲て居た、平兼隆を攻め殺し、檄を、關東八州へ、廻はしました。すると、三浦、千葉などの諸族が、集つて、



まねりましたから、これを率き連れて、大庭景親と、石橋山で、戰をいたしました。所が、大層に、敗けまして、命からがら、杉山に匿れました。すると、又、逐つて來ましたから、今度は、洞穴の中へ、匿れました。此の時、梶原景時が、景親の指圖で、追掛けて來まして、此の洞の中を、搜して、頼朝を見つけました。けれども、捕へるのは、かあいさうだと、思ひましたか、見遁して、何も中には居ないと申しますと、

景親は、いかにも、怪しいと、思つて、今度は、自分から、弓で、穴を探ぐりますと、一羽の鳩が、パタパタと、飛び出しましたから、それでは、實際に居ないのかと云つて。通り越して、しまいましたので、頼朝は、捕へられずに、濟みました。さて、頼朝は、ここを出て、安房へ參らうと思ひ、途途、一味のものを、募りましたら、下總へ、參ります頃には、もう、二萬騎も揃ひました。これを聞いた平清盛は、大層、恐

れて、孫の維盛に、五萬騎を、授けて、擊たせましたが、脆くも、富士川で、水禽の音を、聞いて、逃げ歸りました。間もなく、清盛が、薨去つて、賴朝の威勢は、關東に行き渡り、ついに、鎌倉に、幕府を開くことなりました。

袈裟御前

袈裟の母は、名を、衣川と申しまして、遠藤武者盛遠の、伯母で、ありました。盛遠は、伯母に、『どうか、袈裟を、私の妻に』と、所望いたしました。伯母は、『袈裟には、源渡といふ夫が、あるから』と云つて、これを、斷りますと、盛遠は、なかなか、思ひ止まりません。どうかして、望を、遂げたいと思つて、伯母を、脅したり、すかしたり、爲まして、賴み込みましたから、伯母も、途方に暮れて、居りますところを、袈裟は、この事を聞くと、心配を、はじめました。何うかして、母さまの御心を、や

すめたいこと、いろいろ、心を碎いて、居りますが、今更、夫を、二人奉つことも、なりませず、さりとて、このままにして置けば、いづれ、母さまの、御身の上に、ふりかかる、御難儀、子として、どうして、これが、餘所に、見て居られましよう、何にも、かも、妾あればこそ、と、ひとり、胸を痛めて、居りましたが、そこは、女の思慮の狹い處で、こうとう、自分が、死にさへすれば、事が濟むと思ひました。折よく、

盛遠が、まぬりましたから、袈裟は、盛遠を、人の居ないところへ、呼び入れまして、言ひますには、『御親切のほどは、しみじみ、うれしく、存じますが、夫ある身でありますから、今まで、御斷り申しましたなれど、唯、一つ、

妾が願を叶へて下さらば、卿の、仰に、從ひましよう』と言ふな、聞いて、盛遠は、半ば成就と、打ち喜びまして、『さて何事である、そなたの願こあらば、何なりと、叶へて、進ようから、早く、言つて御覽』と、膝を突出して、尋ねました。袈裟は、重ねて、『妾に、夫さへなくば、卿の仰に、從がひましようから、よからぬことは、存じますれど、卿のお手て、我が夫を殺して下さいませんか』と言ひますと、盛遠は、進

み寄り、『それは、まことに、易いこと、渡さへ、なきものにすれば、我が望は、叶へて下さるか、』と念を入れて、聞きますから、袈裟は、『その御念には、及びませぬこと、さらば、かくかくに』と、日をも、時をも、場所をも、その手筈までも、喋し合はせて、別れました。やがて、その刻限になりましたから、盛遠は、袈裟から聞いて置きました通り、いたしまして、難なく、源渡の寢間に、忍び入り、首尾よく、寢首を取つて、

まづまづ、大願成就と、胸なでおろし、燈に透かして、見ますと、こはいかに、渡の首と、思ひの外、現在、自分が、慕つて居ります、袈裟御前の首で、ありました。すると、盛遠は、自分の迷が、一時に、さめて、僧となりまして、あの名高い、高尾の文覺上人と、なりました。

○紀元一八六五年
元久二年
義時執權

○紀元一八七一年
建暦元年
順德天皇即位

○紀元一八八一年
承久四年
仲恭天皇即位
承久ノ變

○紀元一八八二年

北條時頼

時頼は、泰時の孫でありまして、兄經時が、早く、世を去りましたから、代つて、執權の職に上りました。能く、泰時の遺訓を、守りまして、善き人を取立て、善き政を行ひ、その身は、大層、儉約をしまして、ただただ、下下のことばかりに、心を止めました。のちに、職を讓り、佛門に入つて、最明寺と申しましてからは、行脚僧となり

貞應元年
後堀河天皇即位
○紀元一八八五年
嘉祿元年
泰時執權
○紀光一八九二年
貞永元年
貞永式目ヲ頒ツ
○紀元一八九三年
天福元年
四條天皇即位
○紀元一九〇三年
寛元元年

諸國を巡りまして、難儀をして居るものは、ないかと、見てあるきました。或る時、攝津の難波へ、まゐりまして、軒も傾つて、壁も落ちて、居ります、極く貧乏な家に、一夜を明かしました。すると、年老

わるい役人のために、

後嵯峨天皇即位
經時執權
○紀元一九〇六年
寛元四年
時頼執權
○紀元一九〇七年
寶治元年
後深草天皇即位
○紀元一九一六年
康元元年
長時執權
○紀元一九二〇年
文應元年
龜山天皇即位

つた尼が、夕餉の仕度に、かかりましたが、いかにも、事慣れないやうに、見えましたから、何か事情のあることだろうと、尋ねました。きかれて、尼は、ハラハラと、涙を溢しまして、『妾の家は、代代、この村の主で、御坐いましたが、夫にも、子にも、先たれまして、妾一人、あとへ殘されました。すると、女一人と見込まれまして、家重代の地面から、寶まで、人に奪られました。けれども、女の悲しさ、取り返す術も

○紀元一九二二年
弘長二年
親鸞寂ス

○紀元一九二四年
文永元年
政村執權

○紀元一九二八年
文永五年
時宗執權元使ヲ
卻ク

○紀元一九三四年
文永十一年
元兵三萬入寇

○紀元一九三五年

なく、訴へる道もなく、今は、唯、泣く泣く、暮して、居ります』と、話しましたから、時頼は、いかにも憐に思ひ、其の道の役人に、言ひ付けて、調べさせ、やがて、もとの通りに、爲て遣りました。

蒙古の襲來

第九十代龜山天皇の御宇に、支那の北に當る、蒙古が、大層、強くなつて、西の方は、歐羅巴までも、兵を繰出し、東の方は、宋、

建治元年
後宇多天皇即位
時宗元使ヲ斬ル

○紀元一九四〇年
弘安二年
時宗元使ヲ斬ル

○紀元一九四一年
弘安四年
元入寇ス

○紀元一九四二年
弘安五年
日蓮寂ス

○紀元一九四四年
弘安七年

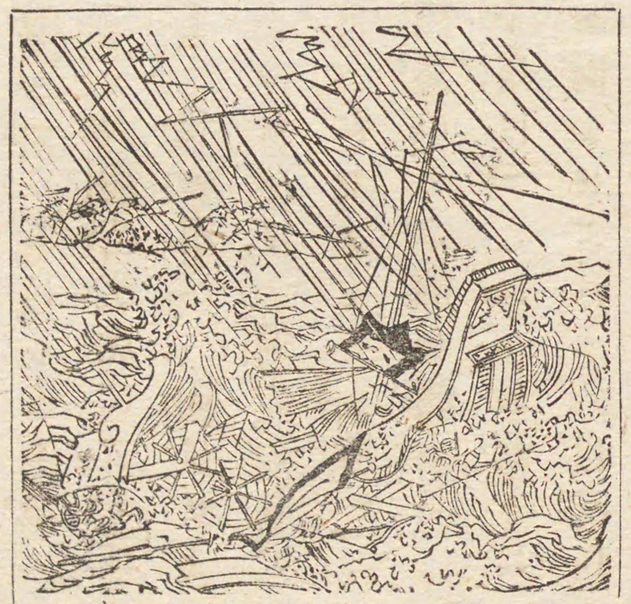
朝鮮をも、滅して、國の名を、元と名づけました。其の勢で、我が日本をも、討ち取らうと、思ひまして、先づ、使を向けて、書面を、我が朝廷へ送りました。朝廷では、これを、鎌倉幕府へ、御下げになつて、御相談になりました。そこで、其の書面を見ると、大層、無禮な書方で、ありましたから、『決して、御返書を、御遣はしになつてはなりません』と、其時の執權、時宗から、奏上まして、其の使は、逐ひ返しました。

貞時執權
○紀元一九四八年
正應元年
伏見天皇即位
○紀元一九五九年
正安元年
後伏見天皇即位
○紀元一九六二年
乾元元年
後二條天皇即位
○紀元一九六八年
延慶元年
花園天皇即位

すると、元の王の忽必烈が、大層、腹を立てて、三萬の大兵を繰出して、我が對馬、壹岐へ、乘込み、男は、大方、殺してしまい、年寄や、女子供は、手の甲へ孔を穿け、これへ、繩を通して、船の外側へ、干魚のやうに、縛つて置き、やがて、筑前の方へ、攻めて參りました。ここでは、我が兵が、なかなか、よく防ぎまして、河野通有など、いふ人は、小舟に乘つて、賊の船へ飛び込み、數十人を、斬り殺し、大將を、生

○紀元一九七二年
正和元年
高時執權
○紀元一九七六年
正和五年
北條顯時、金澤文庫ヲ建ツ
○紀元一九七九年
元應元年
後醍醐天皇即位
○紀元一九八一年
元享元年
記錄所ヲ復ス
○紀元一九八五年

擒にしましたから、逃げ歸りました。そのあとにも、度度、使が、參りましたが、時宗は、皆、これを斬りまして、西國の海岸には、戰の備を、嚴重にしました。



元兵は、これに恐れて、戰をすれば、敗けて來る、使を遣れば、斬

正中二年
正中ノ變

○紀元一九九一年
元弘元年
帝笠置ニ幸ス
楠正成兵ヲ擧ク
高時、光嚴帝ヲ擁立ス

○紀元一九九二年
元弘二年
天皇、隱岐ニ遷サレ給フ
兒島高德、義兵ヲ擧ク
護良親王、兵ヲ擧ク

られてしまいますから、元の王は、クワッと怒り、今度は、唯、一うちに、うち滅ぼさうと、思ひまして、大將范文虎に、十萬といふ大兵を授けて、我が國へ、向はせました。ところが、このたびは、備が、なかなか、嚴重であつて、たやすく、上陸が、出來ませんから、鷹島に、本陣を構へて、居りました。龜山上皇は、これをお聞きになつて、深く御心を惱ませられ、御自身に、石清水に、御參詣なされ、伊勢の大廟へは、

楠正成、千窟籠城

○紀元一九九三年
弘化三年
義貞、則祐、義兵ヲ擧ク
菊池武時、義兵ヲ擧ク
護良親王征夷大將軍トナル
乘輿還幸、京都平定

○紀元一九九四年
建武元年
藤房遁世

手書を御納めになり、御身を以て、國難に代はらうと、御祈りになりました。そうしますと、神風とも申すので、ありましようか、折節、大暴風が、吹き起りましたから、我が兵は、これ幸ひと、激しく、攻めかけ、大勢の元兵を、塵にしました。この有樣を、元の王へ、報らさせようとて、三人だけは、命を助け國へ返して、遣りました。此の役は、今から六百二十年前、後宇多天皇の御宇、弘安四年のことで、ありますから、こ

○紀元一九九五年
建武二年
時行、亂ヲ作ス
直義、護良親王ヲ弑ス
尊氏謀反

○紀元一九九六年
延元元年
帝吉野ニ行幸ス
楠正成戰死ス
名和長年戰死ス
南北分立

○紀元一九九八年
延元三年
義貞戰死ス
北畠顯家戰死ス

れを、弘安の役とも、申します。

護良親王

親王は、後醍醐天皇の、皇子で、ありまして、尊雲法親王と申し上げます。天皇が、鎌倉の無狀を、お怒りになり、急に、北條氏を、討滅さうとの御企が、ありましたから、先づ、比叡山の僧兵を、御方に御引寄せなさらうとの、御思召で、親王を、延暦寺の座主と、なされました。それゆゑ、又、

○紀元一九九九年
延元四年
後村上天皇即位

○紀元二〇〇〇年
興國元年
神皇正統記成ル

○紀元二〇〇八年
正平三年
正行戰死

○紀元二〇〇九年
北朝崇光帝立ツ

○紀元二〇一二年
正平七年
北朝後光嚴帝立

大塔宮とも、申し上げます。のちに、還俗遊ばされて、護良親王と、申されたのであります。北條氏御征伐のためには、大層、御骨折になりまして、いく度も、いく度も、死を決め給ひしことも、ありましたが、まづまづ、建武中興の、めでたい御代になりました。親王は、なかなかの、御聰明な御方で、ありますから、『足利尊氏は、逆臣であるから、生かして置いては、國のためには、ならぬ、折があらば、』と、待つて、居

ッ
○紀元二〇一九年
正平十四年
尊氏卒ス
義詮將軍
○紀元二〇二七年
正平二十二年
義滿將軍
○紀元二〇二八年
正平二十三年
長慶天皇即位
○紀元二〇三一年
正平二十六年
北朝後圓融帝立

られました。尊氏も、さるもの、北條氏のあとへ、又一つ、自分で、幕府を建てやうこの、野心が、ありますから、兎角、親王が、邪魔でなりません。そこで、天皇の、御氣に入りの、藤原廉子といふ女の役人に、取り入りまして、親王のことを、わるざまに、天皇へ、申上げさせました。天皇も、うかと、御信用になつたものですから、尊氏は、これを、よい機として、親王を、鎌倉へ送つて、土牢の中へ、幽閉申し上げま

ッ
○紀元二〇三三年
文中二年
後龜山天皇即位
○紀元二〇四二年
弘和二年
北朝小松帝立ッ
○紀元二〇五二年
元中九年
南北兩朝和ス
細川頼之卒ス
○紀元二〇五三年
元中十年
後小松天皇即位

した。其の後。丁度、尊氏の弟、直義が、番をして居ります時に、北條時氏に攻められ、敗けて、鎌倉を逃げる折、こつそりと、人を遣りまして、親王を弑させました。今も、此土牢は、鎌倉に、殘つて居ります。

○紀元二〇五四年
應永元年
義持將軍

○紀元二〇五五年
應永四年
金閣寺建立

○紀元二〇五九年
應永六年
應永ノ役

○紀元二〇六一年
應永八年
義滿、私ニ明ニ使ヲ送ル

○紀元二〇六八年

兒島高德

兒島高德は、備前の人で、あります。又、備後三郎と云つて、南朝忠臣の一人であります。初め、義兵を、擧げましたけれども、官軍が、敗けて、天皇は、足利尊氏の爲に、隱岐國へ、島流に遭はせらるると、聞きましたから、其の路で、奪ひ奉らうとしまして、待ち受けて、居りましたが、路が、違つて、無効と成ましたから、せめては、王

應永十五年
義滿薨ス

○紀元二〇七三年
應永二十年
稱光天皇即位

○紀元二〇八三年
應永三十年
義量將軍

○紀元二〇八九年
永享元年
後花園天皇即位
義教將軍

○紀元二〇九八年
永享十年

事に勤めるものの、あると云ふことだけでも、御知らせ申したいと、思ひまして、其夜、姿を變へて、こつそり、行在所へ參り、庭に植ゑてある、櫻の樹を削り、こういふ詩を、書き付けて、歸りました。

足利持氏、亂ヲ作ス
新續古今集成ル
○紀元二一〇一年
嘉吉元年
赤松滿祐將軍義教ヲ弑ス
○紀元二一〇二年
嘉吉二年
義勝將軍
○紀元二一〇九年
寶德元年
義政將軍
○紀元二一一三年

天莫空勾踐（テンナカレムナシフスルコウセンヲ）時非無范蠡（トキニアラズナキニンモハンレイ）

翌朝、天皇は、これを、御覽になりまして、なほ、勤王の徒のあることを、お知りになり、大層、お喜びに、なつたと、申します。

櫻井の驛

足利尊氏、弟直義、もろとも、一時、戰に敗けて、西國へ、逃げて、行きましたが、九州の兵を集めて、又又、京師へ、攻め上りました。すると、楠正成は、謀を立てて、

享德二年
關東亂ル
○紀元二一二五年
寛正六年
後土御門天皇即位
○紀元二一二七年
應仁元年
應仁ノ亂起ル
○紀元二一三三年
文明五年
山名宗全、細川勝元卒ス
義尚將軍

天皇に、『今一度、比叡山へ、行幸あらせ給へ』と、奏上げましたが、御用ひに、成ません。そこで、仕方なく、死を決めて、湊川へ、出かけました。途中、櫻井驛を、通り、子の正行を、傍近く呼び寄せて、申すよう、『汝、今、幼なけれども、能く、我が言ふことを、聞け。このたびこそ、天下分け目の戰にて、我死なば、天下は、一時、尊氏の世と、なるべし。されど、かならず、かならず、慾に迷ひ、義を忘れては、なら

○紀元二一三七年
文明九年
應仁ノ亂終ル

○紀元二一三九年
文明十一年
銀閣寺建立

○紀元二一四一年
文明十三年
僧一休寂ス

○紀元二一四七年
長享元年
兩上杉氏亂ヲ作ス

○紀元二一五〇年

ぬ。一人にても、生のこりて、ある中は、金剛山に、立籠り、命がけで、國に忠義を、つくさねばならぬ。これこそ、我れに、盡くす孝行である』と、懇ろに、戒め、かれて、天皇から、賜はりました寶刀を、かたみに殘し、やがて、湊川へ參りまして、戰死を、致しました。正行も、この折の遺訓を守り、忠勤をはげみましたが、のちに、四條畷で、又、戰死を、いたしました。只今、神戸に、湊川神社といふ、お宮があり

延德二年
義植將軍

○紀元二一五三年
明應二年
將軍義植、周防ニ走ル

○紀元二一五四年
明應三年
義澄將軍

○紀元二一五五年
明應四年
北條早雲、小田原ヲ取ル

○紀元二一六一年

ますが、これは、正成を祀つたので、あります。そして、水戸の藩侯、德川光圀と申すお方が、お建てになつた、『嗚呼忠臣楠子之墓』といふ八字を彫り付けた碑が、そこにあります。それから又、四條畷神社といふ、お宮があ

文龜元年
後柏原天皇即位

○紀元二一六八年
永正五年
將軍義澄、近江ニ走ル
義植復任ス

○紀元二一八一年
大永元年
將軍義植走ル
義晴將軍

○紀元二一八三年
大永三年
商船ヲ明國ニ遣ハス

りますが、これは、正行を祀つたもので、あります。

北畠親房

北畠中將親房は、具平親王の、後胤であります。南朝忠臣の、一人でありまして、文學が、能く出來た、人であります。建武中興の政治が、中途で、ゆるみ、間もなく、上には、南北兩統の、天皇が、在はしますのを、嘆いて、皇統正閏の別を、後の代ま

○紀元二一八七年
大永七年
後奈良天皇即位

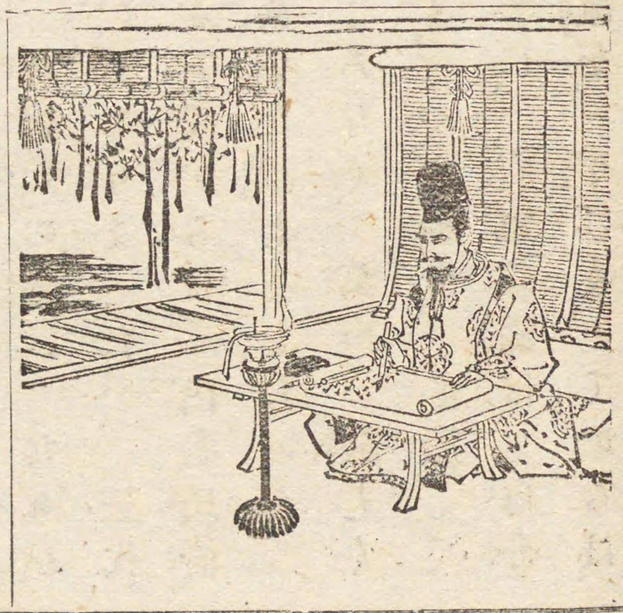
○紀元二一八八年
享祿元年
將軍義晴、近江ニ走ル

○紀元二一九一年
享祿四年
細川高國、三好海雲ト戰フ

○紀元二一九八年
天文七年
武田晴信、父信虎ヲ逐フ

でも、分明るように、しようと思つて、急がしい陣中で、筆を採つて、神皇正統記一卷を、著はしました。

足利義滿



足利尊氏は、幕府を、室町に建てました。それゆゑ、これを、室町幕府と云ひまして、

○紀元二二〇〇年
天文九年
毛利元就、尼子氏ヲ敗ル

○紀元二二〇六年
天文十五年
義輝將軍

○紀元二二〇七年
天文十六年
川中島第一戰

○紀元二二一一年
天文二十年
陶晴賢、大内義隆ヲ弑ス

十五代、二百三十餘年の間、續きました。一代尊氏、二代義詮の時は、未だ、初めて、ありますから、北條氏の掟に、ならひまして、總て、寛かでありましたが、三代義滿の代に、なりましてからは、山名氏清大内義弘などの豪族を、滅しましたから、もはや、憚かるところなく、萬事、嚴しくなりまして、諸將も、やうやう、心服して、まゐりました。ここに、將軍義滿は、自分から、大内義弘の亂を、平げましてからは、

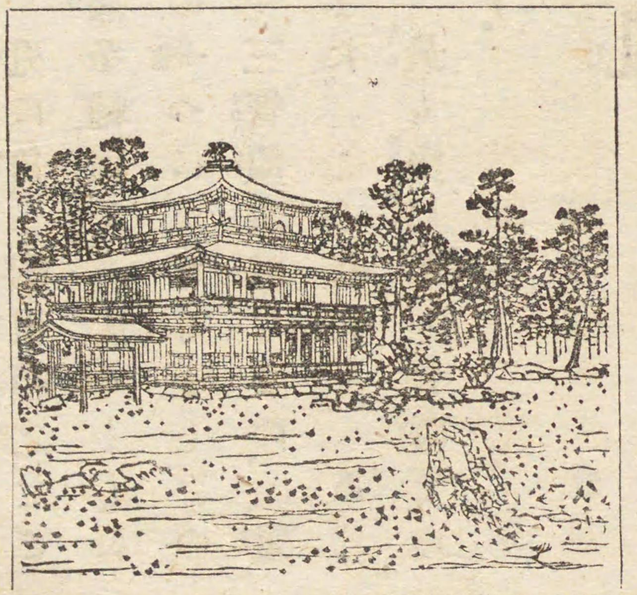
○紀元二二一五年
弘治元年
毛利元就、陶晴賢ヲ誅ス

○紀元二二一八年
永祿元年
正親町天皇即位

○紀元二二一九年
永祿二年
上杉謙信上洛
狩野元信死ス

○紀元二二二〇年
永祿三年
桶峽間ノ戰

大層、驕りを、極めまして、盛に、土木を起し、金閣寺を北山に建てて、歌舞宴樂に、日を送つて、居りました。それがために、財用が、足らなくなつて、來ましたから、こつそり、明國と、交通をはじめ、終局には、明の王か



○紀元二二二一年
永祿四年
川中島第三戰

○紀元二二二四年
永祿七年
信長、美濃ヲ取ル

○紀元二二二五年
永祿八年
將軍義輝弑セラル
義榮將軍

○紀元二二二六年
永祿九年
毛利元就、山陰

ら、封爵を貰つて、『日本國の王』などと、申して居りました。兎に角、細川頼之などの名高い臣が、義滿を輔佐て、居りましたから、南朝、北朝の一つに、なりましたのも、この時代、又、三管領四職などの、定りましたのも、また、この時代で、ありまして、足利氏が、最も繁昌をした時であつたので、あります。

應仁の亂

山陽十三州ヲ領ス

○紀元二二二七年
永祿十年
信長、家康ト成ヲ行フ

○紀元二二二八年
永祿十一年
信長入京
義昭將軍

○紀元二二二九年
永祿十二年
信長、皇居ヲ修ム

時は、後土御門天皇の御宇、應仁元年に、總勢、二十七萬の大軍が、西と東とに分かれ、京の市中で、戰をはじめました。東軍は、その勢十六萬、管領家、細川勝元が、總大將となり、斯波義敏、畠山政長、これに從ひ、室町の東に、陣を取りました。西軍は、その勢、十一萬、職家山名宗全が、總大將となり、斯波義廉、畠山義就、これに從ひ、室町の西に、陣を取りまして、十一年の長い間、をしつ、をされつ、揉合ひ

○紀元二二三〇年
元龜元年
信長、近畿ヲ定ム南蠻人來ル

○紀元二二三一年
元龜二年
信長、叡山ヲ攻ム

○紀元二二三二年
元龜三年
三方原ノ戰

○紀元二二三三年
天正元年
信玄卒ス
足利氏滅亡

ました。これがために、御所と云ひ、官省と云ひ、寺と云ひ、社と云ひ、燒き拂はれないものは、ありませんで、さしも、繁昌な京の町も、燒野同樣となりました。抑も、此の、起りは、細川勝元に、相續人が、ありませんから、山名宗全の子を、もらひ受けました。そのあとで、勝元に、子が生れましたから、その子を、相續人に、定めました。宗全は、これを、快くは思つて居りません。ところへ、管領家の畠山持國にも、

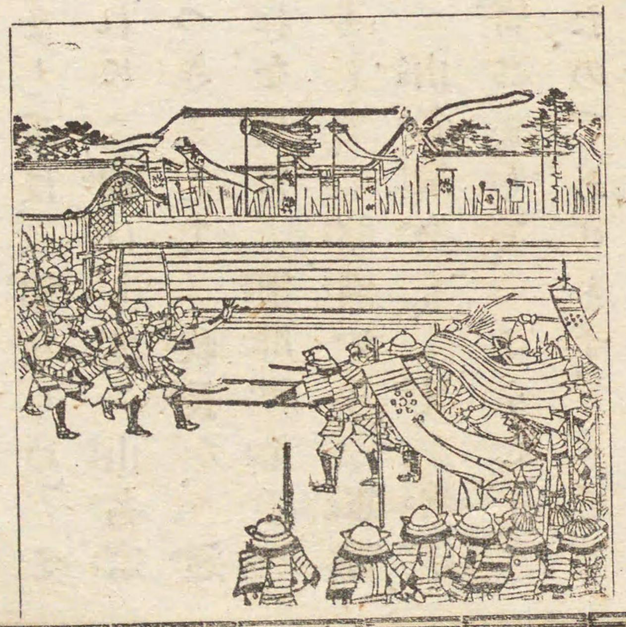
信長、淺井朝倉ヲ滅ス
姉川ノ役

○紀元二二三四年
天正二年
秀吉長濱城主トナル
信長南蠻寺ヲ建ツ

○紀元二二三五年
天正三年
長篠ノ戰

○紀元二二三六年
天正四年
信長安土ニ城ク

又、子がありませんから、甥の政長と、いふものを、相續人と、定めて置きました。やがて、此れも、義就と申す、實子が生れまして、この二人の子が、相續爭を、はじめました。すると、時の將軍、義政公は、『二人の爭は、二人で、



秀吉中國征伐ノ將トナル
二條ノ第ヲ修ス
○紀元二二三七年
天正五年
信長右大臣トナル
○紀元二二三八年
天正六年
謙信卒ス
○紀元二二四二年
天正十年
武田氏滅亡
信長大廟ヲ修ム
光秀信長ヲ弑ス

勝負を、決めたがよい、決して、他人は、この勝負に、加勢をしては、相ならぬ』と、申されました。それにも拘はらず、山名宗全は、義就の方につきまして、政長を、逐ひ出しました。これを見た、細川勝元は、大層に、腹を立てまして、諸國から、軍勢を呼び集めました。山名宗全も、又、劣けじと、軍勢を呼び寄せまして、こうこう、應仁の亂と、なつたのであります。

秀吉光秀ヲ誅ス
○紀元二二四三年
天正十一年
賤ヶ岳ノ戰
秀吉大阪ニ城ク
○紀元二二四四年
天正十二年
小牧ノ戰
秀吉内大臣トナル
○紀元二二四五年
天正十三年
秀吉四國ヲ定ム
秀吉關白

川中島の役

甲斐の國の領主に、武田家といふのが、ありましたが、信玄の代に、なりまして、なかなか、強くなりましたから、四方の國國を、うち滅して、信濃も、大方、その領分と、なりました。そこに、村上義清といふものが居りましたが、これも、信玄に逐ひ立てられましたから、越後の領主、上杉謙信を便つて、行きまして、『どうか、元の領

○紀元二二四六年
天正十四年
秀吉家康ト和ス
秀吉太政大臣トナル

○紀元二二四七年
天正十五年
後陽成天皇即位
聚樂城成ル
秀吉九州ヲ定ム
琉球入貢ス

○紀元二二五〇年
天正十八年
秀吉北條氏ヲ滅ス
伊達政宗降服

地を、取り返して下さい』と、たのみました。そこで、謙信から、信玄へ、挑狀を送りまして、天文十六年から、十永祿四年まで、五年のあひだに、三度まで、信濃の川中島で、村上義清のために、戰ひましたが、いづれども、

家康關八州ニ封セラル
天下一統

○紀元二二五一年
天正十九年
秀吉太閤ト稱ス
秀次關白
朝鮮征伐ノ議決ス

○紀元二二五二年
文祿元年
秀吉朝鮮ヲ征シ
明軍ヲ破ル

○紀元二二五三年
文祿二年

勝負が、つきませんで、和睦をいたしました。まだ、その和睦の前で、ありましたが、信玄が、北條氏康と、戰をはじめましたとき、氏康は、信玄を困せやうと、思ひまして、領内へ、布令を出しまして、『信玄の領内へは、鹽を送つてはならぬ』と、嚴しく、差し止めました。一體、信玄の領地は、山國で、ありまして、これまで、氏康の領地から、鹽を、取り寄せて、居りましたので、すから、今、急に、それが、來ぬやうに、

明國和ヲ請フ
○紀元二二五四年
文祿三年
秀吉伏見ニ城ク
○紀元二二五五年
文祿四年
秀次自殺
耶蘇教ヲ禁ス
○紀元二二五六年
慶長元年
明使來ル
朝鮮再征ヲ決ス
○紀元二二五七年
慶長二年

なりますと、領内の民どもは、大層に、困りました。これを、謙信が、聞きまして、『戰は戰、鹽は鹽だ、それに、氏康は、卑怯な、策で、敵を苦しめて居る』と、思まして、自分のためにも、當の敵では、ありますけれども、信玄のところへ、使をやりまして、『公と、爭ふのは、力づくのことである、卑怯な氏康が、公の御領内へ、鹽を送らないことならば、僕の領地から、取り寄せて、使ひ給へ』と、申してやりま

再ヒ朝鮮ヲ伐ツ
○紀元二二五八年
慶長三年
秀吉薨ス
征韓ノ軍引還ス
○紀元二二五九年
慶長四年
前田利家卒ス
諸將不和
○紀元二二六〇年
慶長五年
關ヶ原ノ戰
豐臣秀頼嗣立ス
天下ノ實權家康ニ歸ス

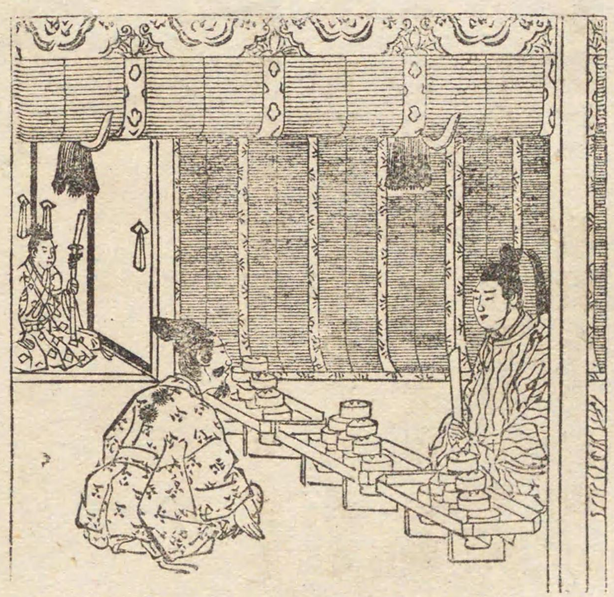
した。信玄も、謙信の大量には、感心したと、云ふことであります。

毛利元就

毛利元就は、大内義隆の部下で、ありまして、代代、安藝國、吉田城を守つて、居りました。時に、その主の義隆が、老臣の陶晴賢に、殺されましたから、元就は、二人の子と共に、義兵を擧げ、晴賢を、討取りまして、やがて、山陰、山陽、十數ケ國の、

英蘭ノ船來ル
○紀元二二六一年
慶長六年
大小判ヲ鑄ル
五十三驛ヲ定ム
伏見學校ヲ立ツ
板倉勝重京都所司代トナル
○紀元二二六三年
慶長八年
秀頼内大臣トナル
家康將軍トナル
○紀元二二六四年
慶長九年

領主となりました。このころ、正親町天皇が、御即位遊ばされましたが、應仁のかた、世の中が亂れて居りますから、國國の守護から、年貢を、朝廷へ納めて、まねりません。それゆゑ、畏れ多いことでありますが、御費用が、



山田長政邏羅ニ入ル
家康韓ト和ス
諸侯ノ邸宅及ヒ妻子ヲ江戸ニ置カシム
○紀元二二六五年
慶長十年
秀忠將軍トナル
家康林道春ヲ徵ス
始メテ煙草ヲ植ウ
○紀元二二六六年
慶長十一年
江戸城ヲ築ク

足りませんで、御即位の御大禮が、のびのびになつて、居りました。元就は、大層、これを嘆きまして、獻金をいたしましたから、永祿三年正月に、漸つと、その御儀式を、擧げさせられました。天皇は、これを、御褒めになつて、元就を、從四位下、太膳大夫と、なされました。

本能寺の變

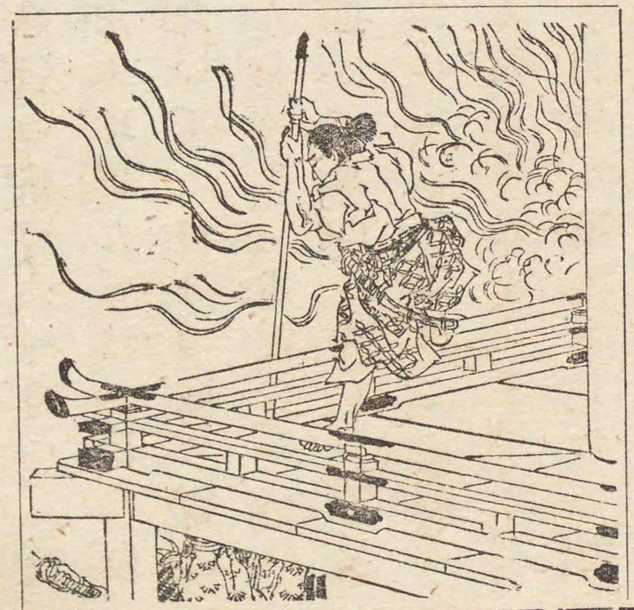
織田信長は、正親町天皇の勅命を、蒙けま

諸藩主松平氏ヲ冒ス
○紀元二二六九年
慶長十四年
島津氏琉球ヲ取ル
和蘭ト通商ヲ始ム
○紀元二二七〇年
慶長十五年
方廣寺ヲ興ス
尾張城ヲ築ク
○紀元二二七一年
慶長十六年
琉球入貢ス

して、やがて、近畿の兵亂を、討ち鎭め、正二位、右大臣、右大將となり、近江の安土に、城を築いて、居りました。時に、中國の毛利を、征伐たせに遣つてある、羽柴秀吉から、『援兵を、送つて下さい』との注進が、有ましたから、信長は、先づ、明智光秀を、先鋒として繰出し、自分も、急いで、安土の城を出て、京の本能寺を、假りに、館として居られました。すると、主君とは云ひながら、信長の仕うちを、かねて、

耶蘇教嚴禁
加藤清正卒ス
○紀元二二七二年
慶長十七年
後水尾天皇即位
○紀元二二七四年
慶長十九年
大阪冬ノ役
大阪ト和ス
○紀元二二七五年
元和元年
大阪夏ノ役
豐臣氏滅フ
○紀元二二七六年

快くは、思つて居らぬ明智光秀は、このたびも、また、主君より、德川家康の、接待役を、申付かつて、居りましたから、念に、念を入れて、其の用意に、取りかかりまして、丁度、立派に、出來上りましたところへ、俄に、毛利



家康薨ス
英人通商ヲ始ム
○紀元二二七八年
元和四年
日光廟成ル
○紀元二二七九年
元和五年
藤原惺窩卒ス
○紀元二二八三年
元和九年
家光將軍トナル
○紀元二二八六年
寛永三年
秀忠家光上洛

征伐の先鋒を、仰付かつたものですから、かねてよりの、堪忍袋の緒が、一時に、絶れまして、接待に用ふ珍器などは、皆、琵琶湖へ投げ入れ、急いで、自分の城の龜山へ歸り、部下の兵を集めて、本能寺を襲ひました。信長は、近侍と共に、能く、防ぎましたが。何を云ふにも、不意のことで、ありますから、力も及びません、こうこう、舘に、火をかけて、自害を致しました。逆臣光秀は、其れより、十三日目に、羽柴秀

秀忠太政大臣
○紀元二二八七年
寛永四年
寛永寺ヲ建ツ
○紀元二二九〇年
寛永七年
明正天皇即位
林道春上野ニ學舍ヲ建ツ
○紀元二二九五年
寛永十二年
南洋西洋諸國ノ船ヲ拒絶ス
○紀元二二九六年

吉のために、討たれました。

征韓の役

豐臣秀吉は、心のままに、天下を一統しましたから、これから、明國を征伐しようと、思ひまして、その戰の手引を、させようと、使を、朝鮮へ遣りました。けれども、朝鮮は、明國を憚つて、手引を、しようと、言ひません。そこで、秀吉は、先づ、朝鮮から、征伐を、初めました。さて、朝鮮は、

寛永十三年
島原亂起ル
寛永通寶ヲ鑄ル

○紀元二二九九年
寛永十六年
異國船ノ來航ヲ禁ス
外交禁止

○紀元二三〇二年
寛永十九年
大饑饉

○紀元二三〇三年
寛永二十年
朝鮮ノ使來ル

さんざんに、打敗されましたから、救を、明國に、たのみました。我が軍は、又、明軍をも、さんざんに、打破りましたが、やがて、和睦を、いたしまして、一旦、引取りました。その後、慶長元年、明國から、使が、國書を持つて

○紀元二三〇四年
正保元年
後光明天皇即位

○紀元二三〇六年
正保三年
明國援兵ヲ乞フ

○紀元二三一〇年
慶安三年
家綱將軍トナル
由井正雪亂ヲ謀ル

○紀元二三一三年
承應二年
玉川水道成ル

參りました。秀吉は、その使者を、伏見城に召んで、會ひました。ところが、其の國書の中に、『汝を封して、日本國王となす』と書いて、ありましたから、秀吉は、大層、その無禮を、怒りまして、『日本國王と、なりたければ、我れは、勝手になる、何とて、明國の世話を、蒙けよう。我れ、もし、國王とならば、天朝を如何するぞ』と、大層、怒りまして、その國書を、使者の、目の前で、切れ切れに、裂きました。それがため

○紀元二三一五年
明暦元年
後西院天皇即位

○紀元二三一七年
明暦三年
江戸大火
林道春卒ス

○紀元二三一八年
萬治元年
明鄭成功援ヲ求ム

○紀元二三一九年
萬治二年
明朱舜水歸化
兩國橋ヲ架ス

に、又、兵を繰出すことに、なりました。

徳川家康

家康が、未だ、幼少い頃、從者に負はれて、城外へ出ました。すると、子供が、大勢、河の兩岸へ、集まりまして、石合戰をして、居ります。家康は、これを見て、『その人數の、少ない方へ、行かう』と、云ひました。從者は、何故かと、怪んで、尋ねますと、家康は、『人數の少ない方は、互に、力を合

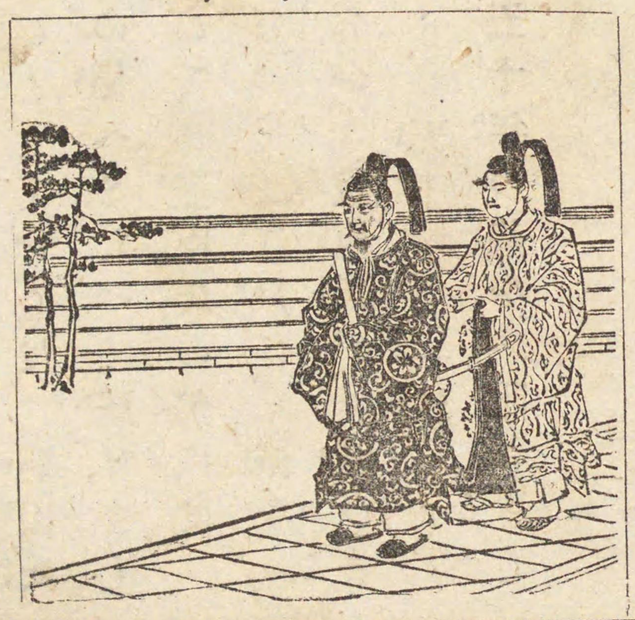
○紀元二三二三年
寛文三年
靈元天皇

○紀元二三二五年
寛文五年
布帛ノ丈尺ヲ定ム

○紀元二三三一年
寛文十一年
仙臺騒動

○紀元二三三三年
延寶元年
英人通商ヲ乞フ
許サズ

せて、負けまいと、働くが、多い方は、人數を恃んで、互に、心が、合はないから、きつと、勝てまい』と、言ひましたが、その通り、人數の少ない方が、勝ちました。かやうに、卓見の人でありましたから、父廣忠の代までは、今川



○紀元二三三五年
延寶三年
狩野探幽卒ス

○紀元二三四一年
天和元年
綱吉將軍トナル

○紀元二三四三年
天和三年
無人島ヲ檢出ス

○紀元二三四四年
貞享元年
新暦ヲ頒ツ

○紀元二三四七年
貞享四年

氏の部下で、三河國の岡崎に、居りました が、今川氏が、滅びましてからは、織田氏のために、武田氏の備へとなつて居りました。織田氏が、滅びて、豐臣氏の代には、關東八國の領主となつて、江戸に、城を、築いて、居りましたが、豐臣氏が、滅びましてから、とうとう、天下を、一統して、徳川の幕府、二百五十年の基を、開きました。

東山天皇即位
殺生禁斷

○紀元二三五〇年
元祿三年
聖廟ヲ湯島ニ移ス
中江藤樹卒ス
土佐光起卒ス

○紀元二三五四年
元祿七年
江戸大火

○紀元二三五六年
元祿九年
輿地圖成ル

新井白石

新井白石は、初めの中は、大層に、貧乏でありしましたが、それを、心にもかけず、餘念なく、勉强して、居りました。其頃、江戸の豪商に、河村瑞賢といふ、人がありまして、その孫女を、白石に娶はしたいと、思ひましたから、『學資として、三千兩の價ある、田地を添へるから、孫女を、貰つて吳れ』と、自分の息子から、申込まさせま

○紀元二三六〇年
元祿十三年
德川光圀薨
僧契仲寂
赤穗義士ノ復讐
○紀元二三六三年
元祿十六年
關東大地震
○紀元二三六七年
寶永四年
富士山噴火
○紀元二三六九年
寶永六年
家宣將軍トナル

した。すると、白石が、申しますには、『昔、人が、潭の上に居つた小さな蛇の口に、僅かばかりの傷を、つけたことが、ありました。やがて、その邊に、大蛇が死んで居りましたから、これを見ましたら、その口に、大層、大きな傷

○紀元二三七〇年
寶永七年
中御門天皇即位
○紀元二三七一年
正德元年
朝鮮ノ使來ル
○紀元二三七三年
正德三年
家綱將軍トナル
○紀元二三七五年
正德五年
大日本史刻成ル
○紀元二三七六年
享保元年

が、ついて居りました。今、私が、あなたの、御助力を、受けまするのは、丁度、小蛇が、僅かばかりの、傷を負ふたやうな、ものでありますけれども、他日、私が、出世した時には、その傷は、なかなか、大きく、なりますから』と、言つて、折角の、申込を、斷りました。後に、大層、出世して、從五位下、筑後守となり、將軍家宣の、儒官を、勤め、時の、側用人、間部詮房と、力を協はせて、いろいろの改革を、いたし

吉宗將軍トナル
○紀元二三七七年
享保二年
江戸大火
○紀元二三八二年
享保七年
荻生徂徠卒ス
○紀元二三八四年
享保九年
衣服ノ華奢ヲ禁ズ
○紀元二三九一年
享保十六年
江戸大火

ました。著書は、三百餘種もありまして、殊に、詩が、上手でありました。

水戸黄門

水戸黄門光圀は、英明な御方でありまして、當時、世の中が、漢學のみに傾いて、國學といへば、たれも、見向くものが、ないのを、非常に、嘆きまして、國學研究のために、大層、盡力致しました。それゆゑ、下河邊長流、僧契冲などの學者が、この時代

○紀元二三九六年
元文元年
櫻町天皇即位
文字金ヲ鑄ル
伊藤東涯卒ス
荷田東麿卒ス
○紀元二四〇四年
延享元年
諸國ニ甘蔗ヲ植ウ
○紀元二四〇五年
延享二年
家重將軍トナル
○紀元二四〇七年
延享四年

に、出てまゐりました。又、勤王の志が、殊に、厚く、昔、忠臣の、した事が、後の世に、忘れられては、ならぬと思つて、自分から、大日本史、二百四十卷を、著はし、中御門天皇に、獻上いたされました。あの攝津の湊川神社に、

桃園天皇即位
○紀元二四一〇年
寛延三年
朝鮮遣使來ル
○紀元二四一一年
寶暦元年
暦ヲ頒ツ
○紀元二四二〇年
寶暦十年
家治將軍トナル
○紀元二四二三年
寶暦十三年
後櫻町天皇即位

『嗚呼忠臣楠子之墓』と云ふ、墓碑を立てられたのも、この黄門公であります。

米艦の渡來

仁孝天皇の御宇、弘仁二年、亞米利加の軍艦が二艘、相模の浦賀へ、來まして、交通を致したいと、申し込みましたが、徳川幕府では、三代將軍家光、このかた、和蘭のほか、外國とは、交通せぬことに、なつて居りましたから、その譯を諭して、斷りま

○紀元二四三一年
明和八年
後桃園天皇即位
○紀元二四三二年
安永元年
江戸大火
○紀元二四四〇年
安永九年
光格天皇即位
○紀元二四四三年
天明三年
淺間山噴火ス
○紀元二四四四年
天明四年

した。その後十年許り經て、孝明天皇の嘉永六年に、米國の、水師提督といつて、今の艦隊司令官、「ペルリ」が、軍艦四艘を、引つれて、又、浦賀へ、來まして、國書を、幕府へ、差出し、交通貿易することを、申し込みました。此度も、又、以前のやうにして、諭して、歸そうと、致しましたが、『是非とも、許すか、許さないかの、返答を聞かなければ、歸らぬ』と言ひますから、已むを得ず、一年を延ばして、其の翌

天下大饑饉

○紀元二四四七年
天明七年
家齊將軍トナル
松平定信老中トナル

○紀元二四五二年
寛政四年
和學所ヲ建ツ

○紀元二四五三年
寛政五年
魯船松前ニ來ル

○紀元二四五八年
寛政十年

年に、返事を、することにして、歸してやりました。すると、次の年、安政元年正月に、なりますと、『昨年の返事が、聞きたい』と、「ペルリ」は、又、又、浦賀へ、來りました。此の時、國中で、大騒動が、始まりました。それは、『外

寛政暦ヲ頒ツ
近藤重藏蝦夷ニ木標ヲ建ツ

○紀元二四六一年
享和元年
本居宣長卒ス

○紀元二四六四年
文化元年
魯使長崎ニ來ル

○紀元二四六六年
文化三年
魯人蝦夷ヲ掠ム
江戸大火

○紀元二四六七年

國と交際つた方が、宜い』と、言ふ人もあれば、『あんな、毛唐人奴に、この神國を、穢さしては、ならぬ』と言ふ人も、ありまして、互に、喧しく、申しますから、幕府でも、彼是れと、返事を延ばして、居りました。すると、「ペルリ」は、中中、嚴しく、迫つて來りましたから、詮方なく、下田、箱館、長崎の三箇所の港だけを、開けて、薪や、水や、食ひ物などは、買ひ取つても、差支ないといふことに、定めまして、やう

文化四年
松前奉行ヲ置ク
○紀元二四六八年
文化五年
英船長崎ヲ擾ス
○紀元二四七一年
文化八年
魯船ヲ擊退ス
○紀元二四七五年
文化十二年
海邊測量圖成ル
○紀元二四七七年
文化十四年
仁孝天皇即位

やう、一段落を、つけました。その後に、露西亞、英吉利、佛蘭西も、つづいて、來りましたから、いづれも、米國同樣に、許して遣りましたので、あります。

櫻田の變

英、露の二國から八釜しく、申込まれまして、此時の總理大臣とも云ふ可き、井伊大老は、『到底、外に、道がない』と、思ひましたから、朝廷の、御思召も伺はず、一存

○紀元二四七八年
文政元年
英船浦賀ニ來ル
○紀元二四七九年
文政二年
畿内大地震
金銀ヲ改鑄ス
○紀元二四八四年
文政七年
一朱金ヲ鑄造ス
○紀元二四八九年
文政十二年
江戸大火
○紀元二四九〇年

で、米、英、露、佛、蘭の、五箇國と、假條約を、結びました。すると、公卿はじめ、當時の、浪士どもが、ひどく、德川幕府の、不都合を、鳴らしました。ことに、朝廷からも、こつそり、水戸齊昭公へ、『毛唐人を、神國の外

天保元年
京都地震

○紀元二四九二年
天保三年
琉球入貢ス
賴山陽卒ス

○紀元二四九五年
天保六年
當百錢ヲ鑄ル

○紀元二四九六年
天保七年
天下大饑饉

○紀元二四九七年
天保八年

へ、逐ひ攘へ』この、勅命が、ありました。これを、探つて、知りました、井伊大老は、『所詮、このままでは、しかたがない』と思ひ定めまして、折節、京都へ上つて、居りました、間部老中に、鷹司、三條などの、公卿を、押し籠めさせ、幕府の方では、水戸齊昭、尾張慶恕、越前慶永などを押し籠め、又、賴三樹三郎、橋本左内、梅田源次郎など、數十人の、浪士を捕へて、獄に入れました。ところが、是れが爲め、かへつ

家慶將軍トナル
大鹽平八郎亂ヲ
作ス
一分銀ヲ鑄ル

○紀元二五〇二年
天保十三年
壬寅曆ヲ頒ツ

○紀元二五〇四年
弘化元年
和蘭人來リ外交
ノ利ヲ說ク

○紀元二五〇五年
弘化二年
米艦浦賀ニ來ル
江戸大火

て、人人の怨を、受けることに、なりました。ここに、水戸藩では、勅旨の邪魔をされ、藩主は押し籠めに、なりましたから、大層、大老を怨みまして、血氣にはやるもの十餘人が、こつそり、藩を逃げ出して、大老を殺さうと思つて、つけねらつて、居りましたが、遂遂、萬延元年三月三日、大雪の降りました朝、上巳の節句の御祝に、大老が登城します折、丁度、櫻田門の外に待伏せて、居りまして、井伊大老を、殺し

○紀元二五〇六年
弘化三年
米、英、魯人、通商ヲ乞フ

○紀元二五〇七年
弘化四年
孝明天皇即位

○紀元二五〇九年
嘉永二年
英人牛痘ヲ傳フ

○紀元二五一三年
嘉永六年
家定將軍トナル
米使ペルリ來ル
砲臺ヲ沿海ニ築ク

○紀元二五一四年
安政元年
米使ペルリ再來
米、英、露、蘭ノ四船、下田、函館ニ碇泊スルヲ許ス
吉田松陰海外ニ赴カントス

○紀元二五一五年
安政二年
江戸大地震

○紀元二五一六年
安政三年

て終いました。

白虎隊

徳川慶喜は、大政を、朝廷に返上しました時、官軍へ刃向ふなどの、心得違ひが、ないように、懇ろに、臣下へ諭しました。けれども、幕府譜代のものどもは、これに、不平を唱へ、『何とかして、今一度、徳川の天下に、したい』と思つて、彼處、此處で、官軍に、抵抗ふものがありました。ここに、

會津藩主の松平容保は、奥羽の諸藩を、語らひまして、若松の城に據りました。そこで、仁和寺宮様が、御總督にならせられ、御征伐に御出向きになりました。會津方では、隊を朱雀、赤龍、玄武、白虎の四隊に、分けまして、各各、一方の口を、防ぎました。そのうち、白虎といふ隊は、十五歳以上、二十歳以下の、藩士の子弟ばかりを、一隊としたのでありまして、瀧澤口で、目醒しく、官軍と、戰ひましたが、次第に減

關東大風
米國ハリス來朝ス
○紀元二五一七年
安政四年
米使將軍ニ謁ス
幕府條約ノ勅許ヲ乞フ
蕃書調所成ル
○紀元二五一八年
安政五年
家茂將軍トナル
幕府假條約ヲ結ブ
「コレラ」病流行ス

つて、殘黨十六人が、城後の飯盛山に登りました。丁度、その時、城外に、火の手が、あがりましたから、もはや、城は陷たものと、思ひまして、一同、城の方を、伏し拜み、凛凛しき最後を、遂げました。大義の道には、踏み迷ひ

○紀元二五一九年
安政六年
列侯及ヒ志士ヲ罰ス
横濱開港
○紀元二五二〇年
萬延元年
井伊大老、櫻田門外ニ殺サル
○紀元二五二一年
文久元年
尊王攘夷論盛ンナリ
浪士英館ヲ襲フ
英、佛、魯、蘭等ニ使ヲ遣ス

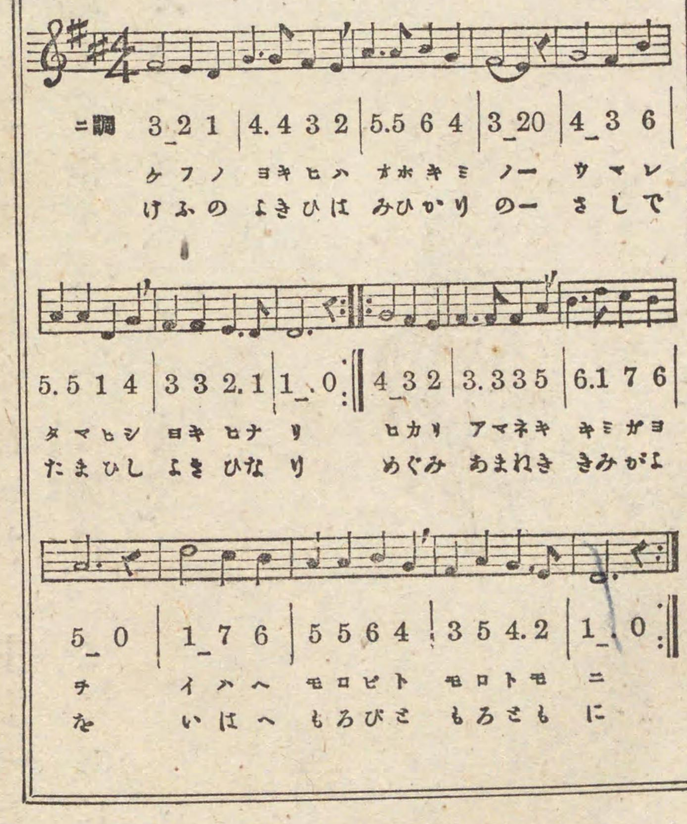
ましたが、二百五十年來仕へた、主君のために、竭そうとしました心懸は、まことに、感心すべきことで、あります。

和宮關東へ降嫁

○紀元二五二二年
文久二年
阪下門ノ變
勅使東下
幕政改革

○紀元二五二三年
文久三年
將軍以下上洛
薩藩英艦ト戰フ
長藩外艦ヲ擊ツ
七卿長州ニ走ル
長藩ノ入京ヲ禁ス
御親征ノ詔下ル
五條生野ノ亂

天長節



○紀元二五二二年
文久二年
青蓮院宮以下ノ幽屏ヲ解キ、井伊黨罰セラル、麻疹流行、大老安藤信睦坂下門ニ要擊セラル、薩人生麥ニ英人ヲ斬ル

○紀元二五二三年
文久三年
高山定之尊氏ノ

御奠都

明治元年八月二十七日、今上天皇御位に即かせらるゝの、禮を行ひ給はれました、御年十七歳。詔を下して、慶應四年を、明治元年と改められ、光仁天皇の古き制を復して、御誕生日を、天長節と稱へ給ふに至りました。大久保利通の建言を御取上になり、江戸を改めて、東京となし、皇居を此に定め給ひました。此年三月、天皇は公卿諸侯

像ヲ梟ス、七卿長州ニ奔ル、長人米艦ヲ砲擊ス英艦生麥ノ償ヲ求テ薩摩ニ寇ス

○紀元二五二四年
元治元年
佐久間象山ヲ斬ル、德川家茂上洛、長州征討、英佛米蘭赤間ヶ關ニ寇ス

○紀元二五二五年
慶應元年
家茂長州親征、

を率ひて天神地祇に、左の五事を誓ひ給ふ、これを五ヶ條の誓詔と申します。

一、廣く會議を起し、萬機公論に決すべし、
二、上下心を一にして、盛に經綸を行ふべし、
三、官武一途、庶民に至るまで、各々其の志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す。
四、舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし。
五、智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。

我が國未曾有の變革を爲さんとし、朕躬以て衆に先んじ、天地神明に誓ひ、大に斯の國是を定め、萬民保全の道を立てんとす。衆亦此の旨趣に基き、協心努力せよ。

英佛米蘭兵艦ヲ帥テ兵庫ニ假約ス、薩長聯合成ル

○紀元二五二六年
慶應二年
長州征軍利アラズ、家茂大坂城ニ薨ス、幕府使ヲ露ニ派シ樺太ノ境界ヲ定ム、清國李鴻章曾國藩ニ代ル

○紀元二五二七年
慶應三年

征臺の役

明治七年、我琉球の人、臺灣島に漂着いたしました。すると臺灣の生蕃等は悉くこの琉球人を殺し。尋いで小田縣の人も、また生蕃の爲めに害を蒙りました。時の外務卿副島種臣は、朝廷の御使として、清國に向ふことゝなりました。この臺灣島は、清國に屬するからであります。而も清國は、臺

徳川慶喜政權ヲ奉還ス、攝關以下舊職ヲ廢シ、總裁議定參與ノ三職ヲ置ク、始テ紙幣ヲ發行ス、巴里万國博覽會ニ出品ス

○紀元二五二八年
明治元年
伏見鳥羽ノ戰、幕府方ノ諸藩ヲ征討ス、
一世一元ニ定ム
江戸ヲ東京トス
奥羽ヲ七國トス

灣を自己の國でないと答へました。是に於て、我國にては臺灣を征伐しやうとの議起り、此年、陸軍中將西鄕從道を大將として向ひました。島民は皆降參いたしましたが、獨り牡丹社の民は降參いたしません。

北海道ヲ置ク、
奥羽平定ス

○紀元二五二九年
明治二年
藩籍奉還ス
封建ヲ廢シ郡縣トス
東京遷都
榎本武揚等降リ函館平定ス、
蝦夷ヲ十二國トス、
始メテ電信線ヲ架ス

○紀元二五三〇年
明治三年

そこで、我軍は、進みすゝんで敵を擊ちこらし、酋長を斬りました。此の勢ひに生蕃等は恐れて悉く降參いたすことゝなりました。すると、初めは自己の國でないと云ふた清國が、今に至つて、臺灣は自己の國であると、書面を以て申込みました。我國では大久保利通を使に立て、その不都合を責めましたが、なかゝ議論が纏まりません。利通は憤つて還らうとしましたが、英國公使が其間に這入つて仲裁し、清國より我國

徴兵令、新律綱領制定ス、
人力車始ル、
普佛戰爭アリ

○紀元二五三一年
明治四年
藩ヲ廢シ縣ヲ置ク、
文部省ヲ置ク、
散髪廢刀隨意、
郵便局ヲ置ク、
清、布哇條約成ル、
圓形銀貨發行、
午砲始ル、

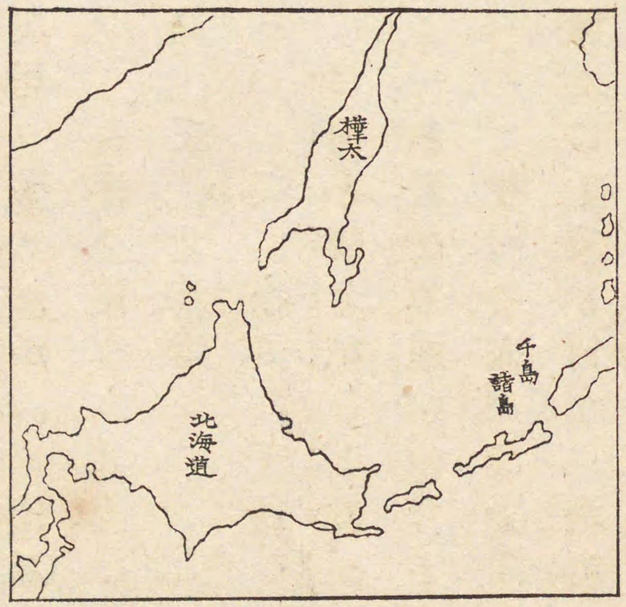
○紀元二五三二年

へ償金五十万兩を差出して事は落着いたしましたから、征伐の軍は悉く凱旋いたしました。

樺太千島交換

徳川幕府の末の頃、露西亞の人民は、我が樺太へ來て、雜居し、終に境界論が起りました。この樺太島は、もとは我國の領地でありました。それを露西亞が欲がって、我國を威したり、すかしたり、いろ〳〵の手段

明治五年
陰暦ヲ陽暦ニ改ム、
新紙幣發行ス、
琉球王ヲ藩主トス、
國立銀行起ル、
京濱鐵道成ル、
瓦斯燈始ル

○紀元二五三三年
明治六年
征韓論起リ内閣分裂ス、
皇城火ク、
證券印紙發行、
地租改正ス、
六鎮臺ヲ置ク、

を盡して、千島と交換やうといたしました。此の千島は、小さな島が飛ひ飛びで、而も其の半分以上は我國の領地でありました。それを露西亞は自己のものとして、千島をやるから樺太をよこせといふのであります、何と無法ではあ